移動人口の居住期間別主食パターン

内　野　澄　子

はじめに：

本研究は昭和51年度厚生省人口問題研究所において行なった「地域人口移動に関する調査」[1] の中で特に主食パターンについての集計，分析結果である．筆者は過去において人口移動と主食パターン選択行動との関係についての研究を行なってきた．そして，人口移動という人口学的行動による社会経済的変化と主食パターン選択行動との間に密接な関係のあることを見出した[2]．ここでは，特に，居住地域における居住期間を中心とし，さらに移動の地域パターンと居住期間との関係から主食パターンの特徴をあきらかにすることを試みた．本論にはいる前に，人口移動と食生活との関係についての筆者の基本的見解をのべておこう．

人口移動は，通常人間の居住場所の地理的，空間的移動のことをいう．この人口移動に関する研究は，次の３つの分野に分けることができる．第１は，人口移動はどうして生ずるか，人々はどうして移動するかといった人口移動の動因についての経済学的，社会学的，人口学的研究である．第２は，人口移動が出生力，死亡秩序や人口分布，人口再生産におよぼす影響についての人口学的研究である．第３は，人口移動が個人や家族のミクロ的観点からみても社会全体のマクロ的観点からみても広義の適応運動であるという観点からの人口移動と他の現象との間の関係の研究である．

本研究は広義ではこの第３の領域に属するものであって，特に生活行動の中でもっとも基本的なものである食行動に限定して人口移動の食行動への影響あるいは移動を契機とする人間の食行動への適応をあきらかにしようとしたものである．

人口移動と食生活・栄養との関係は極めて特殊な問題であるが，色々な理由で国民生活に対して重大な意味をもつに至った．

第１の理由は，昭和30年代の初期に始まった高度経済成長にともなう人口移動の全国的にみられた異常な増加傾向である．昭和30年代前半では年平均520万人，同年代後半では年平均650万人，そして昭和40年代前半では年平均760万人に増加し，さらに昭和44年以降800万人を越えるに至った．しかも，この移動人口の大部分は農山村あるいは地方小都市の青年人口であって，東京，大阪，名古屋といった大都市やその周辺の都市化・工業化地帯への移動であった．このような人口移動と関連しての問題意識は，ぼう大な若年齢人口が地方農村から著しく生活環境の異なった大都市へと移住したばあい食生活に対する対応的変化，したがってまた栄養摂取への影響にあった．特に，食生活に対しなんらかの影響があるならば，人口移動量が極めて大きいだけにその影響は全国的な規模のものとなってくる．

第２の理由は，都市化という現象の食行動への影響である．10数年来，日本人の食生活の平準化傾

1）厚生省人口問題研究所『実地調査報告資料』「昭和51年度実地調査地域人口移動に関する調査報告」，昭52．5．
岡崎陽一「最近における地域人口移動」『人口問題研究』第143号，昭52，7．
内野澄子「人口移動の動向と食生活の構造変動」『人口問題研究』第143号，昭52．7．
内野澄子「人口移動と主食パターンの世代構造的分析」『人口問題研究所年報』第22号，昭53．1．

2）内野澄子「人口変動と食生活」『第１出版K．K』昭52．6．

向が多くの人々によって論じられてきたが，それは高度経済成長開始以降における生活水準の全国民的な上昇や都市的生活様式や生活意識の全国的浸透化によるものと考えられる．特に，南関東，阪神（西近畿），東海の大都市圏人口の集中的増大や都市人口比率の著しい増加にあらわれている．3大都市圏人口は，昭和40年から50年までの10年間に4,500万人から5,500万人へと1,000万人の増加を示している．市部人口は昭和30年になお全国人口の56％にすぎなかったが，20年後の50年には76％に達している．このような人口の急激な都市化を促進せしめたものは人口移動であることはいうまでもない．このばあい，考慮を要する点は，都市化の度合が地域によって異なっており，したがって同じく移動の経験といっても，移動地域の都市化度の差異で食生活適応への影響が異なっている．たとえば，東京と地方中小都市と比較することによって，産業構造，人口密度，情報集積の度合等の差異と都市的生活意識のちがい，したがってそれらの諸要因の食生活への影響に差異のあることをよういに予想することができよう．つまり，人口移動を通じての食生活の分野における適応のしかた，度合も東京への移動者と地方中小都市への移動者によって異なるであろうと考えられる．

第3の理由は，食生活の地域差と人口移動との関係についての問題意識である．個々の地域における伝統的な食生活の特性が都市化，人口移動，ツーリズム，マス・コミを通じて弱体化し，地域差の収縮，平準化といったことが問題となってきた．このような地域差を検討するにあたっても地域人口の変化たとえば農山村から若い人口の大量の流出による過疎化傾向と，反対に大量の若い人口を受け入れた都市の過密化傾向といった問題，世帯の規模や年齢構成の変化といった問題が考慮されなければならない．

最後に，食生活・栄養問題・人口変動という一連の現象の間には潜在的あるいは顕在的な関係が存在していることをあげておきたい．栄養問題も結局においては食生活を通じてのものである以上，食生活との関連で栄養問題を考える必要のあることはいうまでもない．食生活が人間社会の生活の一部であり，人口の都市集中傾向や世帯構造の変化，年齢構成等の人口上の諸変化，経済的，社会的変化等の外部条件の変化が著しければ食行動への影響が大きいことが予想される．栄養の実験科学的研究が必要であることはいうまでもないが，同時に人口の変化もふくめて広く社会変動の影響が食生活におよぶことを考慮して食生活自体の社会的研究が必要である．このことは，栄養問題の社会的研究といった学際的な方法による共同研究の必要であることを示唆している．

移動による居住環境の変化や都市化の進行が食生活にいかなる影響を与えかたについての研究は今日の日本人の食生活・栄養の動向をうらなう上で不可欠のものである．この点については，これまでに系統的な研究はなされていない．本研究では移動という人口学的要因は地域との関連で考慮されているが，さらに居住期間という変数に焦点をおいて特に主食パターンとの関連の分析を行なった．

第1章　居住期間および現住地別にみた主食パターン

1—1　居住期間と主食パターン

ここでは，まず，移動形態のいかんにかかわらず調査対象者総数について，居住期間の観点からその主食パターンの分布を考察してみよう．

居住期間別にみた主食パターンの特徴がもっとも顕著にあらわれているのは，3食米飯パターンと朝パン食，昼・夕米飯パターンおよび朝欠食，昼・夕米飯パターンである．

3食米飯といったもっとも伝統的なパターンは，居住期間が長期化するにともなって規則的に増大している．居住期間5年を境として，3食米飯パターンは5年未満では50％以下であり，5年以上では50％を超え，20年以上では76％となっている．

朝パン食，昼・夕米飯パターンは，3食米飯パターンと同様に居住期間5年を境として異なった水準がみられる．5年未満では20%以上であり，5年以上では20%以下で朝パン食，昼・夕米飯パターンは規則的に少なくなっており，この点において3食米飯パターンとは反対の傾向にある．いいかえれば，3食米飯パターンと朝パン食，昼・夕米飯パターンとが相互補完関係にあって，3食米飯パターンの減少は，朝パン食，昼・夕米飯パターンの増大，3食米飯パターンの増大は，朝パン食，昼・夕米飯パターンの減少をもたらしていることを示している．

朝欠食，昼・夕米飯パターンは居住期間1年未満のものでは15%，1年～3年未満のものでは11%と著しく高くなっているのに対し，10年～20年未満では 3.3%，20年以上では 1.8%と少なくなっている．

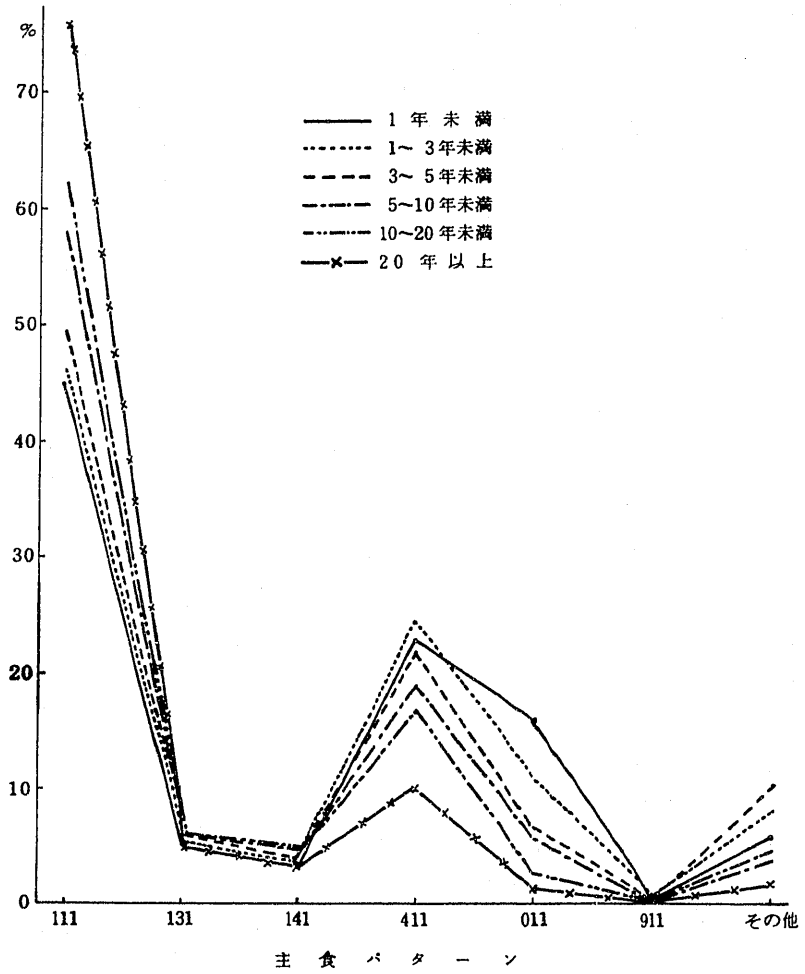
以上の如く，居住期間の長短と主食パターンの選択との間には密接な関係が存在していることをみとめることができよう．居住期間の長短が主食パターンの選択に影響を与える要因については，ここでは断定的な結論を下すことは困難である．それは，居住期間の長短という事実は，極めて単純な指標であって，居住期間の背景である人口自体や地域についての実体をなんら反映するものではないからである．しかし，今までの調査結果や一般的経験によって，居住期間の長短に内在する実体的な要因を若干推測することもできよう．居住期間の長いもの程，3食米飯パターンが多く，反対に居住期間の短かいもの程，3食米飯パターンが少ないといった背景には，前者では，3食米飯パターンを一

表1　居住期間別主食パターン　（総数）

主食パターン	総数	居住期間						
		1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上	不詳
		実数						
総数	7,691	600	970	908	992	1,095	2,930	196
111	4,788	279	459	452	575	681	2,232	110
131	422	27	48	48	63	73	148	15
141	300	21	32	36	48	53	97	13
411	1,285	137	230	203	196	189	306	24
011	435	92	108	65	61	36	53	20
911	40	4	10	5	6	5	10	—
その他	396	39	78	94	41	56	76	12
不詳	25	1	5	5	2	2	8	2
		割合						
総数	100.0	10.00	100.0	100.0	100.0	100,0	100.0	100.0
111	62.3	46.5	47.3	49.8	58.0	62.2	76.2	56.1
131	5.5	4.5	4.9	5.3	6.4	6.7	5.1	7.7
141	3.9	3.5	3.3	4.0	4.8	4.8	3.3	6.6
411	16.7	22.8	23.7	22.4	19.8	17.3	10.4	12.2
011	5.7	15.3	11.1	7.2	6.1	3.3	1.8	10.2
911	0.5	0.7	1.0	0.5	0.6	0.5	0.3	—
その他	5.1	6.5	8.0	10.4	4.1	5.1	2.6	6.1
不詳	0.3	0.2	0.5	0.5	0.2	0.2	0.3	1.0

備考：主食パターンを示した三桁の数字の内容は次の如くである，111＝3食米飯，131＝昼めん，朝・夕米飯，141＝昼パン，朝・夕米飯，411＝朝パン，昼・夕米飯，011＝朝欠食，昼・夕米飯，911＝朝穀類以外のもの，昼・夕米飯，その他は以上の主食パターンに属さないパターン．

図1　居住期間別主食パターン



般に多く選択される高年齢のものや移動経験のない定着者が多くふくまれているであろうし，また後者には，大都市に移動してきた比較的若い年齢層がふくまれていると思われるが，これらの比較的若い移動人口では3食米飯パターンをとるものが相対的に少ない．以上の理由は，居住期間別にみた朝パン食，昼・夕米飯パターンの傾向についてもほぼあてはまるものと思われる．また，居住期間1年未満のものについてみられる著しく高い朝欠食，昼・夕米飯パターンは，大都市へ転入してきた学生や若い就職者の食生活パターンを反映しているものと推測される．

居住期間の長短にかかわらず比較的変化の少ない主食パターンは，昼めん類あるいはパン食，朝・夕米飯パターンである．昼めん類，朝・夕米飯パターンでは居住期間の長期化にともなって増加する傾向がみとめられるが，5％前後であってそれほど著しくない．昼パン食，朝・夕米飯パターンでは，4％前後であって，昼めん類，朝・夕米飯パターンよりも若干低い．しかし，居住期間の影響は少ない．

1―2　居住期間と居住地域からみた主食パターン

まず，東京圏，阪神圏，中京圏の3大都市圏居住者ならびに地方圏（3大都市圏以外の全地域）居住者の主食パターンを居住期間別に考察してみよう．サンプル数の関係から居住期間区分を若干少なくして4グループとして集計してみた．

もっとも重要な主食パターンである3食米飯パターンと朝パン食，昼・夕米飯パターンの地域別居

表 2　3大都市圏および地方圏居住者の居住期間別主食パターン　（総数）

主食パターン	5年未満		5～10年未満		10～20年未満		20年以上		5年未満		5～10年未満		10～20年未満		20年以上	
	実数	割合	実数	割合	実数	割合	実数	割合	実数	割合	実数	割合	実数	割合	実数	割合
	東京圏								阪神圏							
総数	903	100.0	264	100.0	320	100.0	503	100.0	271	100.0	161	100.0	168	100.0	285	100.0
111	283	31.3	115	43.6	147	45.9	275	54.7	113	41.7	84	52.2	89	53.0	179	62.8
131	50	5.5	34	12.9	37	11.6	57	11.3	7	2.6	2	1.2	6	3.5	7	2.5
141	34	3.8	16	6.1	18	5.6	37	7.4	4	1.5	3	1.9	9	5.4	8	2.8
411	262	29.0	60	22.7	76	23.8	73	14.5	99	36.5	57	35.4	49	29.2	73	25.6
011	113	12.5	13	4.9	4	1.3	16	3.2	28	10.3	11	6.8	9	5.4	9	3.2
911	11	1.2	2	0.8	3	0.9	6	1.2	2	0.7	1	0.6	—	—	1	0.4
その他	147	16.3	23	8.7	34	10.6	39	7.8	17	6.3	3	1.9	6	3.5	8	2.8
不詳	3	0.3	1	0.4	1	0.3	—	—	1	0.4	—	—	—	—	—	—
	中京圏								地方圏							
総数	173	100.0	63	100.0	85	100.0	317	100.0	1,131	100.0	504	100.0	522	100.0	1,825	100.0
111	96	55.5	33	52.4	56	65.9	254	80.1	698	61.7	343	68.1	389	74.5	1,524	83.5
131	12	6.9	5	7.9	2	2.4	12	3.8	54	4.8	22	4.4	28	5.4	72	3.9
141	5	2.9	2	3.2	6	7.1	5	1.6	46	4.1	27	5.4	20	3.8	47	2.6
411	36	20.8	17	27.0	13	15.3	34	10.7	173	15.3	62	12.3	51	9.8	126	6.9
011	19	11.0	3	4.8	4	4.7	7	2.2	105	9.3	34	6.7	19	3.6	21	1.2
911	2	1.2	—	—	1	1.2	—	—	4	0.4	3	0.6	1	0.2	3	0.2
その他	3	1.7	3	4.8	3	3.5	4	1.3	44	3.9	12	2.4	13	2.5	25	1.4
不詳	—	—	—	—	—	—	1	0.3	7	0.3	1	0.2	1	0.2	7	0.4

備考：地域の区分は次の如くである．東京圏は東京都，神奈川県，埼玉県，千葉県．阪神圏は京都府，大阪府，兵庫県．中京圏は愛知県，岐阜県，三重県をふくむ．地方圏はこれらの大都市圏を除いた全国地域をふくんでいる．

住期間別に分布をみると図2と図3の如くである．

3食米飯パターンをとるものの割合では，居住期間が長くなるにしたがって増大していくという基本的傾向がいずれの地域でもほぼ共通にみられることと，それぞれの居住期間に対応する割合が，東京圏が最低であり，次いで阪神圏，中京圏と高く，地方圏では最高水準を示していくことが注目される．わずかに，居住期間が5年ないし10年未満のものにおいて，阪神圏と中京圏がほとんど同じ水準にあるといった変化がみられるにすぎない．

朝パン食，昼・夕米飯パターンについてみると図3の如くである．このパターンにおいても，3食米飯パターンと同様に，居住期間の長短との間に相関関係がみとめられる．しかし，それは，居住期間の長期化と共に朝パン食，昼・夕米飯パターンが減少する傾向であって，3食米飯パターンのそれとは反対の傾向である．また，居住期間に対応する朝パン食，昼・夕米飯パターンの水準は，阪神圏においてもっとも高く，東京圏は第2位の水準にある．常識的にも予想される如く，地方圏の朝パン食，昼・夕米飯パターンはいずれの居住期間グループにおいてももっとも低い水準にある．しかし，地方圏のばあいでも居住期間が長期化するにともなってこの朝パン食，昼・夕米飯パターンがなだらかではあるが規則的に低下していることに注目すべきであろう．

次に，最近注目されるに至った朝欠食，昼・夕米飯パターンについてみてみよう．いずれの地域においても，居住期間5年未満のもっとも短かい対象人口において10％前後の朝欠食，昼・夕米飯パタ

図 2　地域別居住期間別 3 食米飯パターン

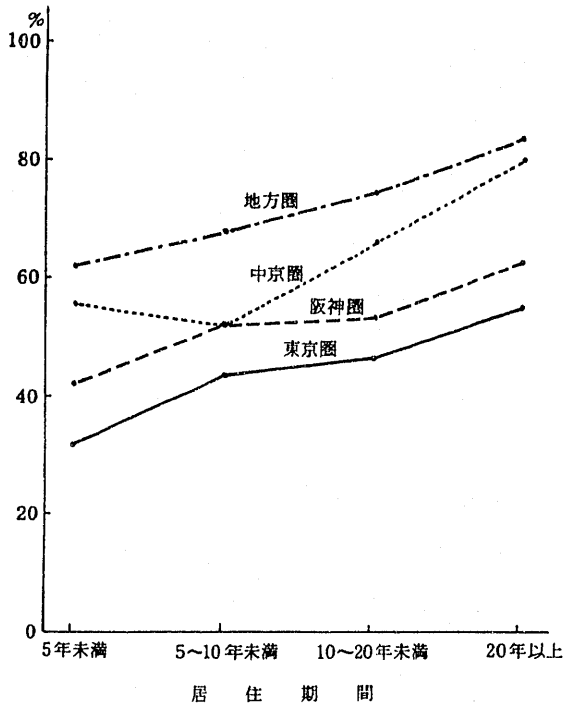
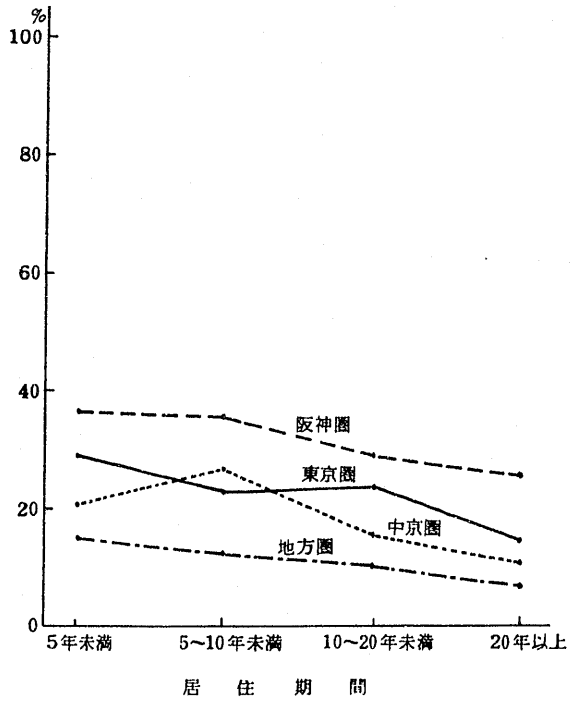


図 3　地域別居住期間別朝パン食パターン



ーンがみられる．しかも，地域間の開きが小さいことが注目される．

たとえば，東京圏の12.5%，阪神圏の10.3%，中京圏の11.0%，地方圏の 9.3% となっており，地方圏においても10%近い水準を示していることは留意すべき傾向である．しかし，居住期間が 5 年以上になるとこの朝欠食，昼・夕米飯パターンは非常に少なくなっている．このことは，このパターンが若い年齢層に集中していることの影響によるものとも推測される．

第 2 章　地方圏居住者の主食パターン

現在地方圏に居住しているものについての主食パターンを居住期間別に考察してみると次の如くである．このばあい，地方圏居住者はすべて移動経験者であるが，いろいろな移動パターンのものがふくまれていることに留意すべきである．

まず地方圏居住者を，その移動パターンを区別しないで，全体として，居住期間別にその主食パターンの分布を考察してみよう（表 3 の如くである）．

全般に，3 食米飯パターンは高く，64% の水準にある．これを居住期間別にみると，居住期間が長期化するにともなって急速に 3 食米飯パターンが増大する傾向がみとめられる．3 年未満では55%にすぎないが，3 年～10年未満では63%，10年以上で

表 3　地方圏居住者の居住期間別主食パターン（移動経験者）

居住期間	総数	111	411	011	131＋141
		実		数	
総数	1,539	991	233	96	144
3 年未満	374	204	75	40	27
3～10年未満	458	888	76	31	45
10 年以上	616	449	73	15	59
		割		合	
総数	100.0	64.4	15.1	6.2	9.4
3 年未満	100.0	54.6	20.1	10.7	7.2
3～10年未満	100.0	62.9	16.6	6.8	9.8
10 年以上	100.0	72.9	11.9	2.4	9.6

備考：不詳を除いた．
主食パターンは 4 種類のみとしたためこれらの合計は総数と一致しない。

は73%となっている．また，朝パン食，昼・夕米飯パターンをとるものの割合も，居住期間が長期化するにともなって規則的に低下する傾向を示している．朝欠食，昼・夕米飯パターンも同様である．昼めん類あるいはパン食，朝・夕米飯パターンをとるものの割合では，居住期間による差は大きくない．しかし，地方圏居住者の居住期間による主食パターンの分布には注目すべき特徴がみとめられる．

2—1　地方圏居住者の居住期間別にみた3食米飯パターンと朝パン食パターン

主食パターンの主流である3食米飯パターンと朝パン食パターンのみについて，地方圏居住者の居住期間別に年齢別にみると図4-(イ)と(ロ)の如くである．ここでは居住期間の区分を3年未満，3年～10年未満，10年以上の3区分とし，さらに年齢も20歳未満を除外した．3食米飯パターンについてみると，注目すべき点は居住期間が3年ないし10年未満が主食パターンの変化に比較的重要な意義をもっていることである．たとえば，20～29歳層ではこの居住期間において3食米飯パターンをとるものが著しく高くなり(約70%)，そして居住期間が10年以上になると低下する．また，50～59歳，60歳以上の高年齢においては，20～29歳層とは反対に，この3年ないし10年未満の居住期間において3食米飯パターンをとるものの割合が最低となっている．しかし，30～39歳層においては居住期間が長くなるにしたがって，3食米飯パターンがほぼ増大する傾向がみられる．

朝パン食，昼・夕米飯パターンにおいても，3年ないし10年未満という居住期間が重要な意義をもっているように思われる．たとえば，20～29歳層ではこの期間において最低水準となり，50～59歳および60歳以上の高年齢層においては最高水準を示している．30～39歳層では3年未満において極めて高い朝パン食，昼・夕米飯パターンがみられるが，居住期間の長期化にともなって著しく低下している．

2—2　地方圏居住者の居住期間別，各年齢層別主食パターン

(1)　20～29歳層の居住期間別主食パターン

主食パターンは，“その他”をふくむ7種類である．これらのパターンが20～29歳人口の居住期間別にどのように分布しているかをみたものが表4—1である．3食米飯パターンについてみると居住期間3年未満のものではもっとも少なく半分の

図4　地方圏居住者の居住期間別，年齢別にみた主食パターン

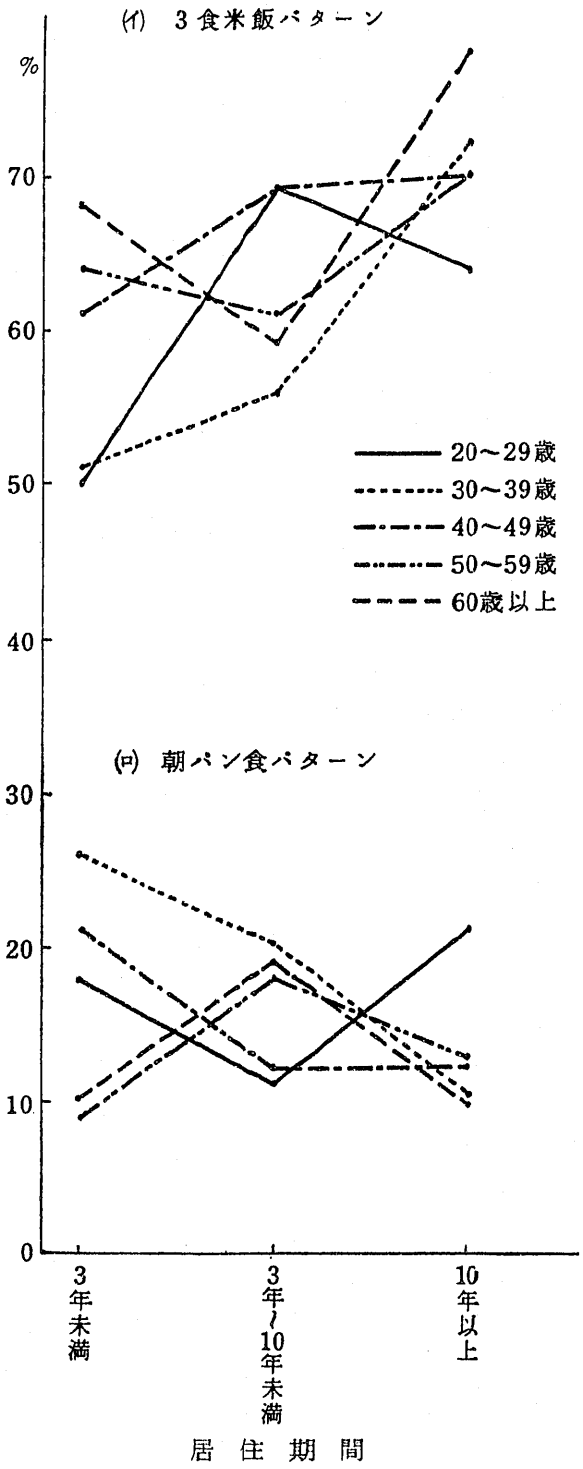


表 4—1　地方圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　（20～29歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	243	136	11	8	39	39	1	8	1
3年未満	141	71	4	5	26	27	1	6	1
3～10年未満	62	43	5	1	7	6	—	—	—
10年以上	14	9	1	1	3	—	—	—	—
				割		合			
総数	100.0	55.9	4.5	3.3	16.0	16.0	0.4	3.3	0.4
3年未満	100.0	50.4	2.8	3.5	18.4	19.1	0.7	4.3	0.7
3～10年未満	100.0	69.4	8.1	1.6	11.3	9.7	—	—	—
10年以上	100.0	64.3	7.1	7.1	21.4	—	—	—	—

表 4—2　地方圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　（30～39歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	359	202	21	8	74	28	3	18	5
3年未満	119	61	7	2	31	7	2	8	1
3～10年未満	158	89	8	4	33	14	1	7	2
10年以上	58	42	3	2	6	4	—	—	1
				割		合			
総数	100.0	56.3	5.8	2.2	20.6	7.8	0,8	5.0	1.4
3年未満	100.0	51.3	5.9	1.7	26.1	5,9	1.7	6.7	0.8
3～10年未満	100.0	56.3	5.1	2.5	20.9	8.9	0.6	4.4	1.3
10年以上	100.0	72.4	5.2	3.4	10.3	6.9	—	—	1.7

表 4—3　地方圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　（40～49歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	392	267	19	14	55	18	1	17	1
3年未満	62	38	—	1	13	5	—	4	1
3～10年未満	147	101	9	6	19	7	—	5	—
10年以上	163	115	9	4	21	5	1	8	—
				割		合			
総数	100.0	68.1	4.8	3.6	14.0	4.6	0.3	4.3	0.3
3年未満	100.0	61.3	—	1.6	21.0	8.1	—	6.5	1.6
3～10年未満	100.0	68.7	6.1	4.1	12.9	4.8	—	3.4	—
10年以上	100.0	70.6	5.5	2.5	12.9	3.1	0.6	4.9	—

表 4—4　地方圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　（50～59歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	273	184	19	17	34	7	1	9	2
3年未満	33	21	4	2	3	1	—	2	—
3～10年未満	49	30	2	4	9	2	1	1	—
10年以上	176	123	12	10	22	4	—	4	1
				割		合			
総数	100.0	67.4	7.0	6.2	12.5	2.6	0.4	3.3	0.7
3年未満	100.0	63.6	12.1	6.1	9,1	3.0	—	6.1	—
3～10年未満	100.0	61.2	4.1	8.2	18.4	4.1	2.0	2.0	—
10年以上	100.0	69.9	6.8	5.7	12.5	2.3	—	2.3	0.6

表 4—5　地方圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　（60歳以上）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	272	202	12	15	31	4	—	8	—
3年未満	19	13	1	1	2	—	—	2	—
3～10年未満	42	25	2	4	8	2	—	1	—
10年以上	205	160	8	9	21	2	—	5	—
				割		合			
総数	100.0	74.3	4.4	5.5	11.4	1.5	—	2.9	—
3年未満	100.0	68.4	5.3	5.3	10.5	—	—	10.5	—
3～10年未満	100.0	59.5	4.8	9.5	19.0	4.8	—	2.5	—
10年以上	100.0	78.0	3.9	4.4	10.2	1.0	—	2.4	—

備考：居住期間の不詳は除いた．

50.4%にすぎない．しかし，3年～10年未満ではもっとも高く69.4%となっているのに対し10年以上では64.3%と低下している．特徴的なのは居住期間のもっとも短かい3年未満のものであって，3食米飯パターンが50%と少ないのに対応して，朝欠食，昼・夕米飯パターンが19%，朝パン食，昼・夕米飯パターンが18%と高くなっており，この2つのパターンで40%近くを占めている．20～29歳層で居住期間3年未満ということは，若い年齢の移動人口であり，その主食パターンが地方圏居住者においてもこのように，3食米飯パターンから離脱する傾向が強いことは注目すべきであろう．

（2）30～39歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層においても特に注目されるのは，居住期間3年未満であって，3食米飯パターンは51.3%と低く，他方朝パン食，昼・夕米飯パターンが26.2%と著しく高くなっている．しかし，朝欠食，昼・夕米飯パターンは20～29歳層とは異なり5.9%と低い．また，この30～39歳層の特徴としては朝パン食，昼・夕米飯パターンが一般に多く，居住期間3年未満では21%となりかなり高い朝パン食パターンの定着を示している（表4—2）．

（3） 40～49歳層の居住期間別主食パターン

このような中年齢層においても，居住期間の短かい3年未満のものにおいて3食米飯パターンが61％でもっとも少なく，朝パン食，昼・夕米飯パターンが21％と高く，また朝欠食，昼・夕米飯パターンでも8％に達していることは留意を要する点であろう．3年～10年未満，10年以上の主食パターンの分布はそれぞれ類似した傾向を示しているが，3年未満のものと著しい開きのあることは，このような中年齢層においても，移動の影響があらわれていると推測される（表4―3）．

（4） 50～59歳層の居住期間別主食パターン

中高年齢の後期，老年の初期と考えられる50～59歳における主食パターンの分布を，居住期間別にみると3年～10年未満がもっとも特徴的である．3食米飯パターンのものは61％で，他の居住期間のものに比較してもっとも低く，また朝パン食，昼・夕米飯パターンは18％と著しく高く，3年未満のものが9％であるからそれの2倍に達している（表4―4）．

（5） 60歳以上層の居住期間別主食パターン

この老年齢層の主食パターンの特徴は，50～59歳層のばあいと類似している．居住期間3年～10年未満において3食米飯パターンがもっとも少なく(59.5％)，朝パン食，昼・夕米飯パターンが19％で非常に多くなっていることが注目される（表4―5）．

第3章　3大都市圏居住者の主食パターン

現在3大都市圏（東京圏，阪神圏，中京圏）に居住しているものについての主食パターンを居住期間別に考察してみると次の如くである．このばあい，3大都市圏居住者はすべて移動経験者であるが，いろいろな移動パターンのものがふくまれていることに留意すべきである．

3大都市圏居住者を，移動パターンにかかわらず，全体としての主食パターン分布を居住期間別にみると表5の如くである．

3食米飯パターンの水準は全般に低く34％の水準にある．これを居住期間別にみると，この居住期間の長期化にともなって急速に増大するという顕著な関係がみとめられる．3年未満ではわずかに34％，3年～10年未満では43％．10年以上では51％となっている．朝パン食，昼・夕米飯パターンはそれほど顕著ではないが，3年未満では29％，3年～10年未満では28％と高く，10年以上では23％と低下している．朝欠食，昼・夕米飯パターンは3年未満で著しく高く約17％，さらに3年～10年未満では8％，10年以上では3％と著しい規則的低下がみとめられる．昼めん類あるいはパン食，朝・夕米飯パターンについてみると居住期間の長期化にともなって規則的に増大している．

表5　3大都市圏居住者の居住期間別主食パターン

（移動経験者）

居住期間	総数	111	411	011	131＋141
		実		数	
総数	2,163	931	574	184	256
3年未満	608	204	177	101	50
3～10年未満	745	317	209	56	85
10年以上	784	400	179	25	117
		割		合	
総数	100.0	43.0	26.5	8.5	11.8
3年未満	100.0	33.6	29.1	16.6	8.2
3～10年未満	100.0	42.6	28.1	7.5	11.4
10年以上	100.0	51.0	22.8	3.2	14.9

備考：不詳は除いた．
主食パターンは4種類のみとしたためこれらの合計は総数と一致しない．

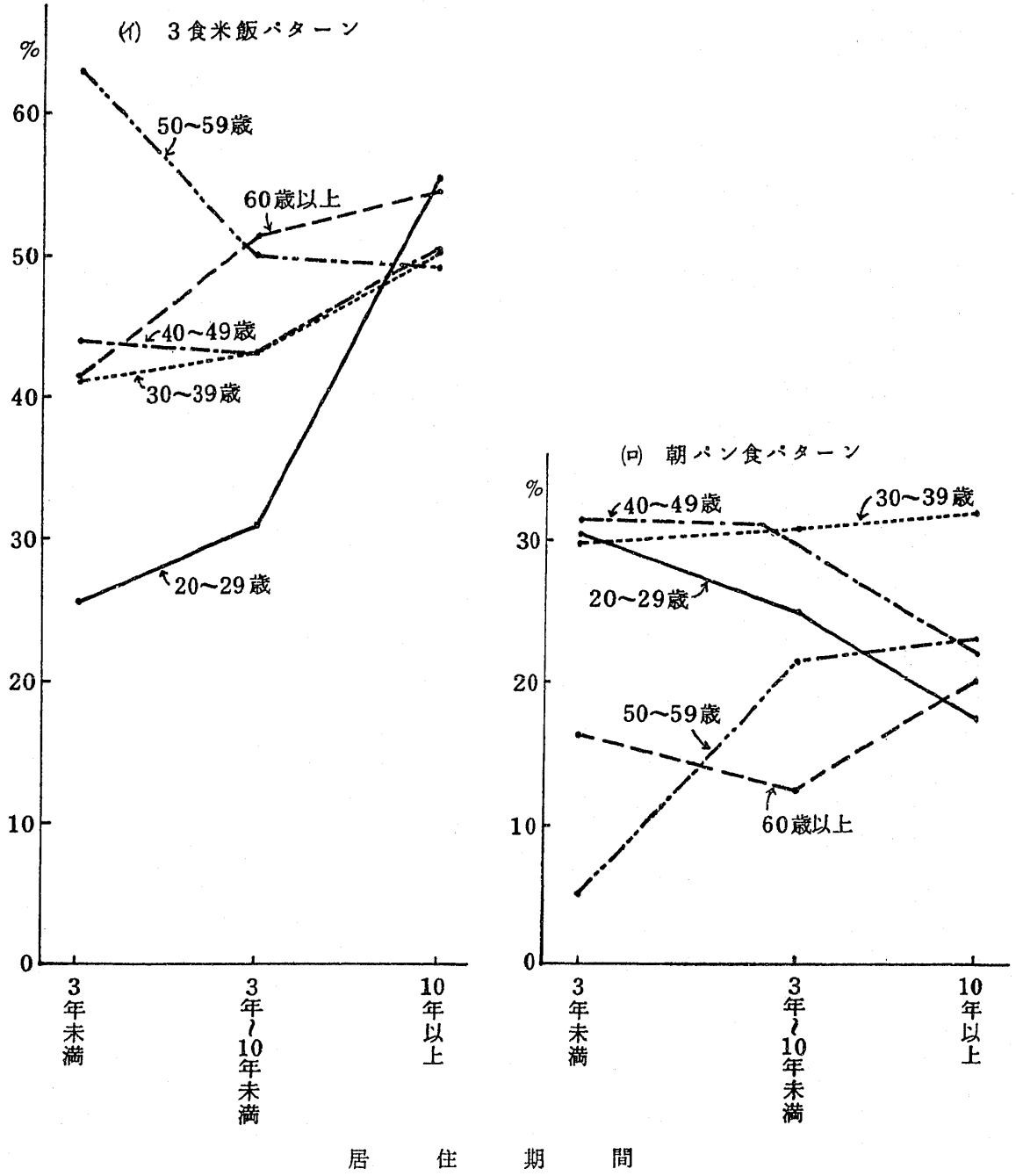
以上のような3大都市圏における主食パターンの分布において居住期間との間に著しい規則的な関係がみとめられることは注目すべきであろう．それがどのような理由によるものであるかは，新しい課題としてさらに詳細な研究を必要とするであろう．

3－1　3大都市圏居住者の居住期間別にみた3食米飯と朝パン食パターン

図5－(イ)(ロ)は3大都市圏居住者の居住期間別，年齢別に3食米飯パターンと朝パン食，昼・夕米飯パターンの分布を示したものである．

3食米飯パターンについてみると居住期間の短かいものにおいてその割合は低くなっている（50～59歳層は例外になっているが後述する如く該当数が極めて少ないことによるものである）．特に，20～29歳のもっとも若い年齢層の居住期間3年未満のものではわずか25%，3年～10年未満でも30%余にすぎない．しかし，10年以上になると3食米飯パターンが56%にまで激増する．これは大都市圏へ移住した当時は子供であって，親の主食パターンの影響を強く受けているものと推測される．

図5　3大都市圏居住者の居住期間別，年齢別にみた主食パターン



朝パン食，昼・夕米飯パターンの1つの特徴は，30～39歳層であって，居住期間の長短にかかわらずほぼ30％という高水準が一貫してみられることである．戦後における主食パターンの変化をもっとも強く受けた年齢層であることが重要な要因であると思われる．この30～39歳層に近い傾向を示しているのが40～49歳層と20～29歳層である．3年未満の短期間居住者ではいずれも30％の高水準の朝パン食，昼・夕米飯パターンを示している．20～29歳層では居住期間の長くなるにつれてこの主食パターンの割合はかなり急速に低下している．特に10年以上の長い居住期間のものでは20～29歳層のものでも20％以下となり，居住期間10年以上の60歳以上のものの水準とほぼ同様である．

さらに注目される傾向は，30～39歳層を除き，その他の年齢層では若いものもそして中・高・老年層のいずれもが，居住期間10年以上ではほぼ20％前後の水準に集中していることである．これは1つには居住期間が長期のものは，親と同居しているため，親の嗜好としての主食パターンの影響を反映しているものと思われる．

表 6—1　3大都市圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　（20～29歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	486	135	19	14	140	107	6	64	1
3年未満	346	89	11	8	104	81	5	47	1
3～10年未満	115	36	6	4	29	23	1	16	—
10年以上	18	10	2	1	3	1	—	1	—
				割		合			
総数	100.0	27.8	3.9	2.9	28.8	22.0	1.2	13.2	0.2
3年未満	100.0	25.7	3.2	2.3	30.1	23.4	1.4	13.6	0.3
3～10年未満	100.0	31.3	5.2	3.5	25.2	20.0	0.9	13.9	—
10年以上	100.0	55.6	11.1	5.6	16.7	5.6	—	5.6	—

表 6—2　3大都市圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　（30～39歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	593	257	46	16	180	44	7	41	2
3年未満	177	74	14	5	53	18	1	12	—
3～10年未満	312	135	21	7	97	24	6	20	2
10年以上	99	45	11	4	29	2	—	8	—
				割		合			
総数	100.0	43.3	7.8	2.7	30.4	7.4	1.2	6.9	0.3
3年未満	100.0	41.8	7.9	2.8	29.9	10.2	0.6	6.8	—
3～10年未満	100.0	43.3	6.7	2.2	31.1	7.7	1.9	6.4	0.6
10年以上	100.0	50.0	12.2	4.4	32.2	2.2	—	8.9	—

表 6—3　3大都市圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　(40～49歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	487	227	47	23	130	14	4	40	2
3年未満	54	24	5	1	17	2	1	3	1
3～10年未満	197	85	19	8	61	3	—	21	—
10年以上	232	116	22	14	51	9	3	16	1
				割		合			
総数	100.0	46.6	9.7	4.7	26.7	2.9	0.8	8.2	0.4
3年未満	100.0	44.4	9.3	1.9	31.5	3.7	1.9	5.6	1.9
3～10年未満	100.0	43.1	9.6	4.1	31.0	1.5	—	10.7	—
10年以上	100.0	50.0	9.5	6.0	22.0	3.9	1.3	6.9	0.4

表 6—4　3大都市圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　(50～59歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	301	151	27	20	67	7	3	26	—
3年未満	19	12	3	—	1	—	1	2	—
3～10年未満	74	37	8	4	16	2	—	7	—
10年以上	205	101	16	16	48	5	2	17	—
				割		合			
総数	100.0	50.2	9.0	6.6	22.3	2.3	1.0	8.6	—
3年未満	100.0	63.2	15.8	—	5.3	—	5.3	10.5	—
3～10年未満	100.0	50.0	10.8	5.4	21.6	2.7	—	9.5	—
10年以上	100.0	49.3	7.8	7.8	23.4	2.4	1.0	8.3	—

表 6—5　3大都市圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　(60歳以上)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	296	161	21	23	57	12	1	21	—
3年未満	12	5	2	1	2	—	—	2	—
3～10年未満	47	24	2	6	6	4	—	5	—
10年以上	230	128	16	15	48	8	1	14	—
				割		合			
総数	100.0	54.4	7.1	7.8	19.3	4.1	0.3	7.1	—
3年未満	100.0	41.7	16.7	8.3	16.7	—	—	16.7	—
3～10年未満	100.0	51.1	4.3	12.8	12.8	1.7	—	10.6	—
10年以上	100.0	55.7	7.0	6.5	20.9	3.5	0.4	6.1	—

備考：居住期間の不詳は除いた．

3－2　3大都市圏居住者の居住期間別，各年齢層別主食パターン

（1）　20～29歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では，居住期間10年以上のものは当然のことであるが，表6－1にみられる通り極めて少ないため除外して考察することが適当である．3年未満の居住期間のもっとも短かいものが圧倒的に多いが，その特徴は3食米飯パターンが26％にすぎず，朝パン食，昼・夕米飯パターンが30％と著しく高く3食米飯パターンの水準を上回っている．また，朝欠食，昼・夕米飯パターンが23％を占めていることも見逃すことのできない特色であろう．居住期間が3年～10年未満と長くなると，3食米飯パターンが31％に増大し，朝パン食，昼・夕米飯パターンが25％，朝欠食，昼・夕米飯パターンが20％と低下し，3年未満のものにみられた際立った特徴がある程度かんわされている．

（2）　30～39歳層の居住期間別主食パターン

20～29歳層に比較して，この年齢層のまず第1の特徴は3食米飯パターンが20～29歳の30％未満の水準から40％の水準に増大していることである．居住期間別にみても，長期となるにしたがって3食米飯パターンが増大している．第2の特徴は，朝パン食，昼・夕米飯パターンの割合が，居住期間の長短にかかわらず，ほとんど30％前後に集中していることである．しかし，朝欠食，昼・夕米飯パターンでは居住期間3年未満では10.2％ともっとも高く，次いで3年～10年未満では7.7％，10年以上では2.2％と著しく少なくなっており，居住期間の影響が顕著にあらわれていることが注目される（表6－2）．

（3）　40～49歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では3年未満の居住期間該当者が極めて少ないため，主食パターンの分布の考察には統計上不適当であろう，居住期間3年～10年未満および10年以上の区分についてみると，その主食パターン分布は，30～39歳層のそれに非常に類似している．3食米飯パターンが40％から50％，朝パン食，昼・夕米飯パターンが30％前後である．朝欠食，昼・夕米飯パターンは30～39歳よりもはるかに少なくなっていることが1つの特徴であろう（表6－3）．

（4）　50～59歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層においても居住期間3年未満の該当者はさらに少なくなっている．この年齢層の特徴は，3食米飯パターンが50％水準に増大し，朝パン食，昼・夕米飯パターンが20％水準に低下し，朝欠食，昼・夕米飯パターンが極めて少ないことである．以上のような傾向は，居住期間別にみてもほぼ共通にみられ，著しい差はみとめられない（表6—4）．

（5）　60歳以上層の居住期間別主食パターン

この年齢層の特徴は，50～59歳層に比較すると，3食米飯パターンがさらに増大して55％水準に達し，朝パン食，昼・夕米飯パターンが多少低下する傾向がある．居住期間3年未満や3年～10年未満の該当者は極めて少ないため，居住期間別比較は困難である（表6－5）．

表7　3大都市圏と地方圏間移動者の居住期間別主食パターン

居住期間	総数	111	411	011	131＋141
	実数				
総数	2,309	1,135	540	185	255
3年未満	690	280	177	97	54
3～10年未満	766	373	193	60	85
10年以上	778	449	157	21	103
	割合				
総数	100.0	49.2	23.4	8.0	11.0
3年未満	100.0	40.6	25.7	14.1	7.8
3～10年未満	100.0	48.7	25.2	7.8	11.1
10年以上	100.0	57.7	20.2	2.7	13.2

備考：不詳は除いた．
主食パターンは4種類のみとしたためこれらの合計は総数を一致しない．

第4章　3大都市圏と地方圏間移動者の居住期間別主食パターン

3大都市圏と地方圏間の移動経験者につ

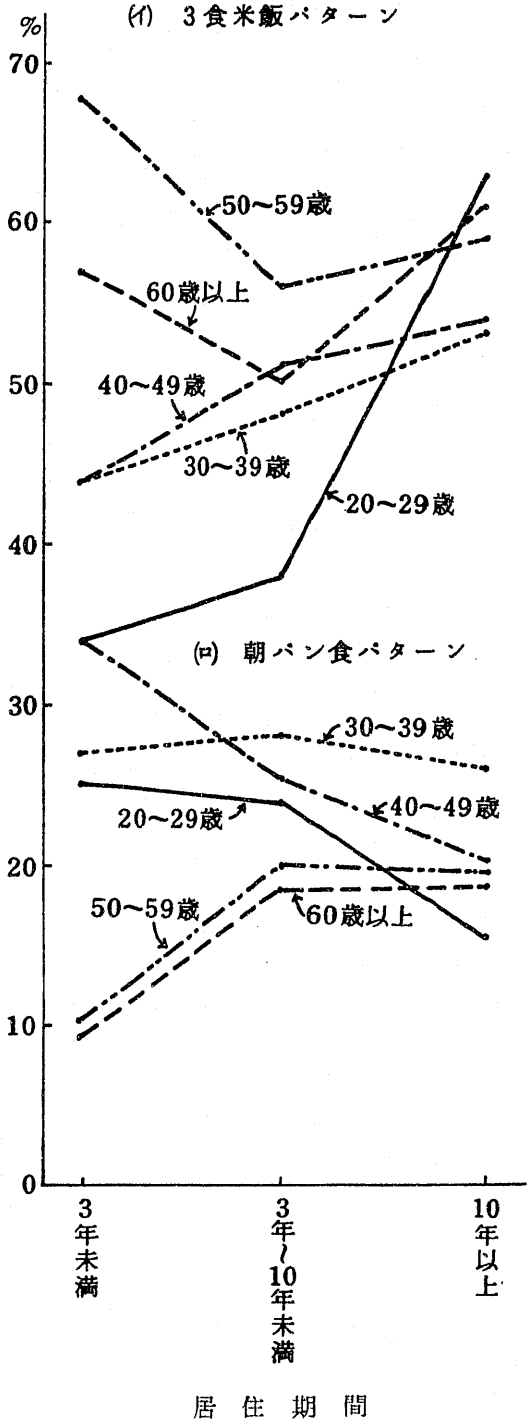
いて，居住期間別に主食パターンの分布を考察してみよう．ここでは3大都市圏と地方圏間を移動して，現在は地方圏に居住しているもの，または現在3大都市圏に居住しているものの両者がふくまれている．

ここでの主食パターンを居住期間別にみると表7の如くである．3食米飯パターンをとるものの割合は居住期間が長期化するにともなって，規則的に増大している．また朝パン食，昼・夕米飯パターンでは居住期間3年未満と3年～10年未満においては，それぞれ26%，25%で大きな差がみられないが，10年以上になると20%と減少している．朝欠食，昼・夕米飯パターンでは3年未満が14%ともっとも高く，居住期間のもっとも長い10年以上の居住者ではわずか3%で短期間居住者との開きが大きい．

4—1　3大都市圏と地方圏間移動者の居住期間別にみた3食米飯パターンと朝パン食パターン

地方圏と3大都市圏間を移動しているもの全体について，各年齢層別に，居住期間別に3食米飯パターンと朝パン食，昼・夕米飯パターンのみについてその特徴をみてみると図6—(イ)，(ロ)の如くである．

図6　3大都市圏と地方圏間移動者の居住期間別，年齢別にみた主食パターン



3食米飯パターンの特徴は，居住期間別にみてこのパターンをとるものの割合は年齢層によって著しく異なっていることである．30～39歳層および40～49歳層においては居住期間が長期化するにともなって3食米飯パターンをとるものの割合が規則的に増大している．20～29歳の若い年齢層では，基本的には30～39歳，40～49歳層と類似した傾向を示しているが，居住期間による開きが著しい．特に，3年未満および3～10年未満では30%台の低水準にあるのに対して10年以上では60%を越えている．他方において，50歳以上の高年齢層では居住期間のもっとも短い3年未満では3食米飯パターンのものが多く，それ以上の期間ではかなり著しく低水準にあることが注目される．

朝パン食，昼・夕米飯パターンの特徴は，30～39歳層では居住期間による差がほとんどみられないことと，20～29歳層および40～49歳層では居住期間が短かいもので多く，長い居住期間で少なくなっていること，50～59歳および60歳以上の高年齢層では，3年未満のもっとも短期間居住者でもっとも

表 8—1　3大都市圏と地方圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　(20～29歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	517	188	21	16	129	99	5	57	2
3年未満	362	125	11	11	92	75	4	42	2
3～10年未満	115	44	8	2	28	20	1	12	—
10～20年以上	19	12	2	1	3	—	—	1	—
				割		合			
総数	100.0	36.4	4.1	3.1	25.0	19.1	1.0	11.0	0.4
3年未満	100.0	34.5	3.0	3.0	25.4	20.7	1.1	11.6	0.6
3～10年未満	100.0	38.3	7.0	1.7	24.3	17.4	0.9	10.4	—
10～20年以上	100.0	63.2	10.5	5.3	15.8	—	—	5.3	—

表 8—2　3大都市圏と地方圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　(30～39歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	643	306	42	16	174	51	4	43	7
3年未満	215	96	15	5	58	19	3	18	1
3～10年未満	318	154	21	7	88	26	1	17	4
10年以上	86	46	4	4	23	4	—	4	1
				割		合			
総数	100.0	47.6	6.5	2.5	27.1	7.9	0.6	6.7	1.1
3年未満	100.0	44.7	7.0	2.3	27.0	8.8	1.4	8.4	0.5
3～10年未満	100.0	48.4	6.6	2.2	27.7	8.2	0.3	5.3	1.3
10年以上	100.0	53.5	4.7	4.7	26.7	4.7	—	4.7	1.2

表 8—3　3大都市圏と地方圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　(40～49歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	504	261	45	21	120	19	2	34	2
3年未満	64	28	3	2	22	3	1	3	2
3～10年未満	203	105	18	9	52	6	—	13	—
10年以上	221	119	22	7	45	9	1	18	—
				割		合			
総数	100.0	51.8	8.9	4.2	23.8	3.8	0.4	6.7	0.4
3年未満	100.0	43.8	4.7	3.1	34.4	4.7	1.6	4.7	3.1
3～10年未満	100.0	51.7	8.9	4.4	25.6	3.0	—	6.4	—
10年以上	100.0	53.8	10.0	3.2	20.4	4.1	0.5	8.1	—

表 8—4　3大都市圏と地方圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　(50～59歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	326	192	25	23	61	6	3	15	1
3年未満	28	19	2	1	3	—	1	2	—
3～10年未満	75	42	7	5	15	2	—	4	—
10年以上	212	125	15	16	42	4	2	8	—
				割		合			
総数	100.0	58.9	7.7	7.1	18.7	1.8	0.9	4.6	0.3
3年未満	100.0	67.9	7.1	3.6	10.7	—	3.6	7.1	—
3～10年未満	100.0	56.0	9.3	6.7	20.0	2.7	—	5.3	—
10年以上	100.0	59.0	7.1	7.5	19.8	1.9	0.9	3.8	—

表 8—5　3大都市圏と地方圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　(60歳以上)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	319	188	22	24	56	10	1	18	—
3年未満	21	12	3	1	2	—	—	3	—
3～10年未満	55	28	3	5	10	6	—	3	—
10年以上	240	147	15	17	44	4	1	12	—
				割		合			
総数	100.0	58.9	6.9	7.5	17.6	3.1	0.3	5.6	—
3年未満	100.0	57.1	14.3	4.8	9.5	—	—	14.3	—
3～10年未満	100.0	50.9	5.5	9.1	18.2	10.9	—	5.5	—
10年以上	100.0	61.3	6.3	7.1	18.3	1.7	0.4	5.0	—

備考：居住期間の不詳は除いた.

少なく10%であるが，それ以上の長い居住期間のものでは20%に近い水準を示している.

4—2　3大都市圏と地方圏間移動者の居住期間別，各年齢層別主食パターン

次に，年齢層別に居住期間別に主食パターン分布について考察してみよう（表8-1, 8-2, 8-3, 8-4, 8-5 を参照).

（1）20～29歳層の居住期間別主食パターン

居住期間別にみるとかなり規則的な主食パターン分布の特徴がみとめられる．3食米飯パターンはすでにのべた如く，居住期間の長期化にともなって増大し，朝パン食，昼・夕米飯パターンは反対に減少し，また朝欠食，昼・夕食パターンは3年未満でもっとも高く21%，3年～10年未満で17%と低くなっている.

（2）30～39歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では3食米飯パターンが居住期間が長くなるにつれて著しく規則的に増大する傾向を示しているが，朝パン食，昼・夕米飯パターンやその他のパターンではあまり著しい変化を示していな

いのが特徴である.

（3） 40～49歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では，30～39歳層とはかなり異なった特徴がみられる．3食米飯パターンでは居住期間の長期化にともなって規則的に増大する傾向は30～39歳層と同様であるが，朝パン食，昼・夕米飯パターンでは反対に居住期間が長くなるにつれて顕著な低下傾向を，また，昼めん類，朝・夕米飯パターンでは居住期間の長さにともなって規則的な増大傾向を示している.

（4） 50～59歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層の主食パターン分布を居住期間別にみるとかなり不規則である．わずかに昼パン食，朝・夕米飯パターンが居住期間の長期化にともなって増大する傾向や朝パン食，昼・夕米飯パターンが3年～10年未満，10年以上の長期居住者において高い(約20%)といった特徴がみられるにすぎない．なお，居住期間3年未満は該当者が少ないため比較は困難である.

（5） 60歳以上層の居住期間別主食パターン

この年齢層の主食パターン分布の居住期間別分布は50～59歳層のそれに類似している。3食米飯パターンの水準は居住期間とはあまり関係がない．朝パン食，昼・夕米飯パターンでは，50～59歳層と同様，3年～10年未満および10年以上の居住期間では18%と同じ水準であり，3年未満ではその約半分の9.5%と低くなっているが50～59歳層と同様該当者が極めて少ないため比較は困難である.

第5章　3大都市圏と地方圏間移動者で現在3大都市圏居住者の主食パターン

前章においては，現在の居住地のいかんにかかわらず，3大都市圏と地方圏間移動者全体を対象としたが，本章では現在3大都市圏に居住している人口の主食パターンを居住期間別に考察する.

表9　3大都市圏と地方圏間移動者で現在3大都市圏居住者の主食パターン

居住期間	総数	111	411	011	131＋141
		実		数	
総数	1,417	598	382	124	163
3年未満	452	153	128	74	34
3～10年未満	516	225	143	39	59
10年以上	435	216	105	10	68
		割		合	
総数	100.0	42.2	27.0	8.8	11.5
3年未満	100.0	33.9	28.3	16.4	7.5
3～10年未満	100.0	43.6	27.7	7.6	11.4
10年以上	100.0	49.7	24.1	2.3	15.6

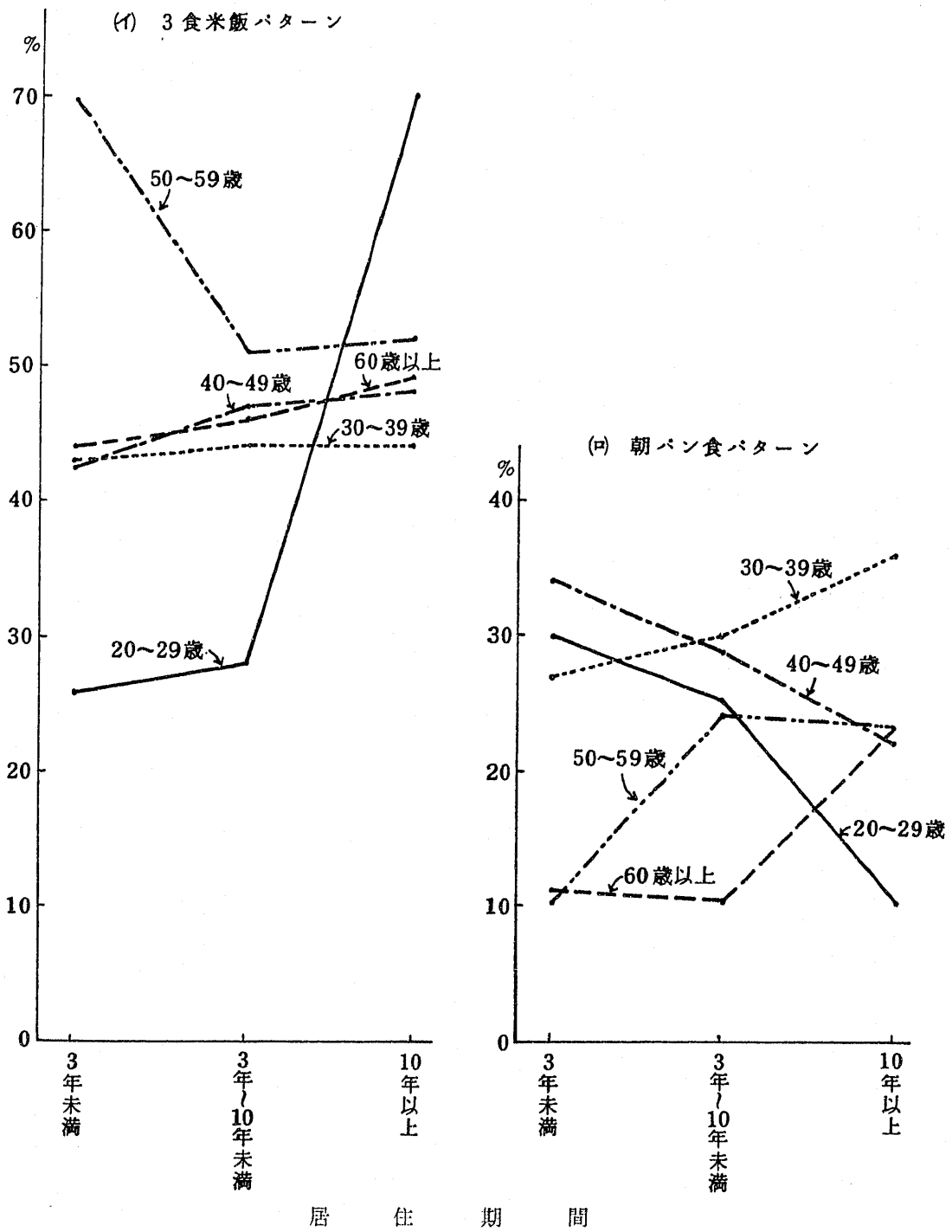
備考：居住期間の不詳は除いた.
主食パターンは4種類のみとしたためこれらの合計は総数と一致しない.

ここでの3食米飯パターンをとるものの割合は表9の如く，居住期間と規則的な関係を示している．居住期間3年未満ではわずかに34%であるのに対して，3年～10年未満では44%，10年以上で50%と高くなっている．また，朝パン食，昼・夕米飯パターンは3年未満では28.3%，3年～10年未満では27.7%とあまり差がないが，10年以上では24%と低くなっている．朝欠食，昼・夕米飯パターンでは3年未満が16%，3年～10年未満では8%，10年以上では2%と著しい開きがみられる．以上のことは最近における大都市圏への移動者において主食選択に対する反応が，それ以外の移動パターンのものよりもはるかに鋭敏であることを示唆している.

5—1　3大都市圏と地方圏間移動者で現在3大都市圏居住者の3食米飯パターンと朝パン食パターン

主食パターンの代表的ともいうべき3食米飯パターンと朝パン食パターンをとりあげ，居住期間別に，年齢別にその特徴を考察してみよう．図6—(イ)と(ロ)はこれらの2種類の主食パターンを図示した

図 7　3大都市圏と地方圏間移動者で現在3大都市圏居住者の居住期間別，年齢別にみた主食パターン



ものである．

まず3食米飯パターンについてみると，30～39歳，40～49歳，60歳以上の年齢層においては居住期間の長短にかかわらず45%前後の水準に著しく安定している．特に，30～39歳においてはほとんど変化がみられない．しかし，20～29歳および50～59歳層においては，居住期間と共に著しい変化をみせている．20～29歳層では，居住期間3年未満，および3年～10年未満においては30%以下の著しく低い水準にあるが，10年以上の長期になると70%という異常に高い水準を示している．しかし，10年以

上の長期居住者の該当者は後にのべる如く極めて少ないため，この高い3食米飯パターンをとるものの割合は統計的に問題がある．次に50～59歳層であるが，3食米飯パターンをとるものの割合が3年未満の短期居住者において著しく高いが，3年～10年未満および10年以上においては50％の水準に安定している．この50～59歳層においても，居住期間3年未満の該当者は極めて少なく，統計的に問題がある．

次に，朝パン食，昼・夕米飯パターンについてみてみよう．年齢別にみた居住期間別の特徴は次の如くである．20～29歳および40～49歳層においては，居住期間が長くなるにしたがって，朝パン食，昼・夕米飯パターンをとるものの割合が低下する傾向がみられる．しかし，30～39歳層では全く反対に居住期間の長期化にともなって朝パン食，昼・夕米飯パターンのものの割合が高くなる傾向がある．50～59歳，60歳以上層の高年齢層では，3年～10年未満では著しい差がみられるが，10年以上の長期居住者では同一水準となっていることが注目される．一般に，若い年齢層ならびに居住期間の短かいばあいに，朝パン食，昼・夕米飯パターンのものの割合が高いといえよう．しかし，20～29歳のもっ

表 10—1　3大都市圏と地方圏間移動者で現在3大都市圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　(20～29歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	368	102	14	10	106	78	5	52	1
3年未満	271	72	8	7	80	60	4	39	1
3～10年未満	81	23	5	2	21	17	1	12	—
10年以上	10	7	1	—	1	—	—	1	—
				割		合			
総数	100.0	27.7	3.8	2.7	28.8	21.2	1.4	14.1	0.3
3年未満	100.0	26.6	3.0	2.6	29.5	22.1	1.5	14.4	0.4
3～10年未満	100.0	28.4	6.2	2.5	25.9	21.0	1.2	14.8	—
10年以上	100.0	70.0	10.0	—	10.0	—	—	10.0	—

表 10—2　3大都市圏と地方圏間移動者で現在3大都市圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　(30～39歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	392	174	26	11	117	28	2	32	2
3年未満	127	55	10	3	34	13	1	11	—
3～10年未満	214	96	14	5	65	15	1	16	2
10年以上	47	21	2	3	17	—	—	4	—
				割		合			
総数	100.0	44.4	6.6	2.8	29.8	7.1	0.5	8.2	0.5
3年未満	100.0	43.3	7.9	2.4	26.8	10.2	0.8	8.7	—
3～10年未満	100.0	44.9	6.5	2.3	30.4	7.0	0.5	7.5	0.9
10年以上	100.0	44.7	4.3	6.4	36.2	—	—	8.5	—

表 10—3　3大都市圏と地方圏間移動者で現在3大都市圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　(40～49歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	316	149	33	12	84	10	2	25	1
3年未満	35	15	3	1	12	1	1	1	1
3～10年未満	144	68	13	6	42	3	—	12	—
10年以上	135	65	16	5	30	6	1	12	—
				割		合			
総数	100.0	47.2	10.4	3.8	26.6	3.2	0.6	7.9	0.3
3年未満	100.0	42.9	8.6	2.9	34.3	2.9	2.9	2.9	2.9
3～10年未満	100.0	47.2	9.0	4.2	29.2	2.1	—	8.3	—
10年以上	100.0	48.1	11.9	3.7	22.2	4.4	0.7	8.9	—

表 10—4　3大都市圏と地方圏間移動者で現在3大都市圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　(50～59歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	179	94	14	14	42	1	3	11	—
3年未満	10	7	—	—	1	—	1	1	—
3～10年未満	49	25	5	3	12	—	—	4	—
10年以上	118	61	9	11	28	1	2	6	—
				割		合			
総数	100.0	52.5	7.8	7.8	23.5	0.6	1.7	6.1	—
3年未満	100.0	70.0	—	—	10.0	—	10.0	10.0	—
3～10年未満	100.0	51.0	10.2	6.1	24.5	—	—	8.2	—
10年以上	100.0	51.7	7.6	9.3	23.7	0.8	1.7	5.1	—

表 10—5　3大都市圏と地方圏間移動者で現在3大都市圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　(60歳以上)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	162	79	14	15	33	7	1	13	—
3年未満	9	4	2	—	1	—	—	2	—
3～10年未満	28	13	2	4	3	4	—	2	—
10年以上	125	62	10	11	29	3	1	9	—
				割		合			
総数	100.0	48.8	8.6	9.3	20.4	4.3	0.6	8.0	—
3年未満	100.0	44.4	22.2	—	11.1	—	—	22.2	—
3～10年未満	100.0	46.4	7.1	14.3	10.7	14.3	—	7.1	—
10年以上	100.0	49.6	8.0	8.8	23.2	2.4	0.8	7.2	—

備考：居住期間の不詳は除いた.

とも若い年齢層における10年以上の長期居住者の著しく低い朝パン食，昼・夕米飯パターンの水準は，該当者が著しく少ないという統計上の誤差の影響に留意する必要があろう．

5—2　3大都市圏と地方圏間移動者で現在3大都市圏居住者の居住期間別，各年齢層別主食パターン

次に，3大都市圏と地方圏を移動し，現在3大都市圏に居住しているものについて，年齢別に，居住期間別の主食パターンの分布をみてみよう．表10-1，10-2，10-3，10-4，10—5はそれぞれの年齢別に示したものである．

（1）20～29歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では10年以上の長期居住者は極めて少ないため除外しておこう．すでに前述した如く，3食米飯パターンは，3年未満では27％と低く，3年～10年未満では28％と若干高くなっている．しかし，朝パン食，昼・夕米飯パターンでは3年未満は30％に近く，3年～10年未満の26％よりかなり高くなっている．朝欠食，昼・夕米飯パターンは3年未満で22％，3～10年未満で21％といずれも高い．しかし，居住期間のもっとも短かいもので，朝パン食，昼・夕米飯パターンや朝欠食，昼・夕米飯パターンが特に高いことは十分注目すべき必要があろう．

（2）30～39歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層の特徴は，朝パン食，昼・夕米飯パターンをとるものの割合が居住期間の長期化にともなって増大していることである．3食米飯パターンの水準は44％前後であまり変化はみられない．この年齢層でも居住期間3年未満では10％の朝欠食，昼・夕米飯パターンがあることは注目される．

（3）40～49歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では，居住期間の長期化にともなって，3食米飯パターンの割合が増大し，朝パン食，昼・夕米飯パターンが減少する傾向がみられる．

（4）50～59歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では居住期間3年未満のものは極めて少ないため比較は困難である．居住期間3年～10年未満および10年以上についてみると3食米飯パターンはいずれのばあいでも，51％，朝パン食，昼・夕米飯パターンもまた24％前後であって，居住期間の影響はみられない．

（5）60歳以上層の居住期間別主食パターン

60歳以上層ではその大部分が居住期間10年以上となっており，居住期間の比較はこんなんである．しかし，居住期間10年以上のこの年齢層における主食パターンの分布自体注目される．それは，3食米飯パターンが50％以下であり，朝パン食，昼・夕米飯パターンが23％を占めているということである．

表 11　3大都市圏と地方圏間移動者で現在地方圏居住者の主食パターン

居住期間	総数	111	411	011	131＋141
	実数				
総数	892	537	158	61	92
3年未満	238	127	49	23	20
3～10年未満	250	148	50	21	26
10年以上	343	233	52	11	35
	割合				
総数	100.0	60.2	17.7	6.8	10.3
3年未満	100.0	53.4	20.6	9.7	8.4
3～10年未満	100.0	59.2	20.0	8.4	10.4
10年以上	100.0	67.9	15.2	3.2	10.2

備考：居住期間の不詳は除いた．
主食パターンは4種類のみとしたためこれらの合計は総数と一致しない．

第6章　3大都市圏と地方圏移動者で現在地方圏居住者の主食パターン

現在，3大都市圏以外の全国の地方圏に居住しているが，過去において3大都市圏

に居住した経験のある者についての主食パターンを考察してみよう．

表11にみられる如く，現在地方圏に居住しているものの(還流移動者)3食米飯パターンの割合は，居住期間の長期化にともなって規則的な増大傾向を示していることと，この水準が前述の3大都市圏への移動居住者に比較して著しく高いことが注目される．このような3食米飯パターンの選択の度合が移動居住地によって異なっている理由についてはここで断定する資料がないが，地方圏への移動居住者では3食米飯パターンをとるものの割合の高い地方圏の環境に復帰したことと，比較的3食米飯パターンを選択する度合の高い年齢層が還流人口にふくまれていること，また地方圏での居住期間が長くなるにしたがって3食米飯パターンを選択するものの多い環境に再適応していったこと，などのいくたの要因が推測される．

6—1　3大都市圏と地方圏間移動者で現在地方圏居住者の3食米飯パターンと朝パン食パターン

図8—(イ)，(ロ)は3食米飯パターンと朝パン食，昼・夕米飯パターンを年齢別，居住期間別に示したものである．

20～29歳の若い年齢層を除き，一般に，居住期間が長くなるにしたがって3食米飯パターンが増加する傾向がみられる．このような傾向を典型的にあらわしているのは30～39歳層である．居住期間が3年未満では47%，3年～10年未満56%，10年以上では64%となっている．

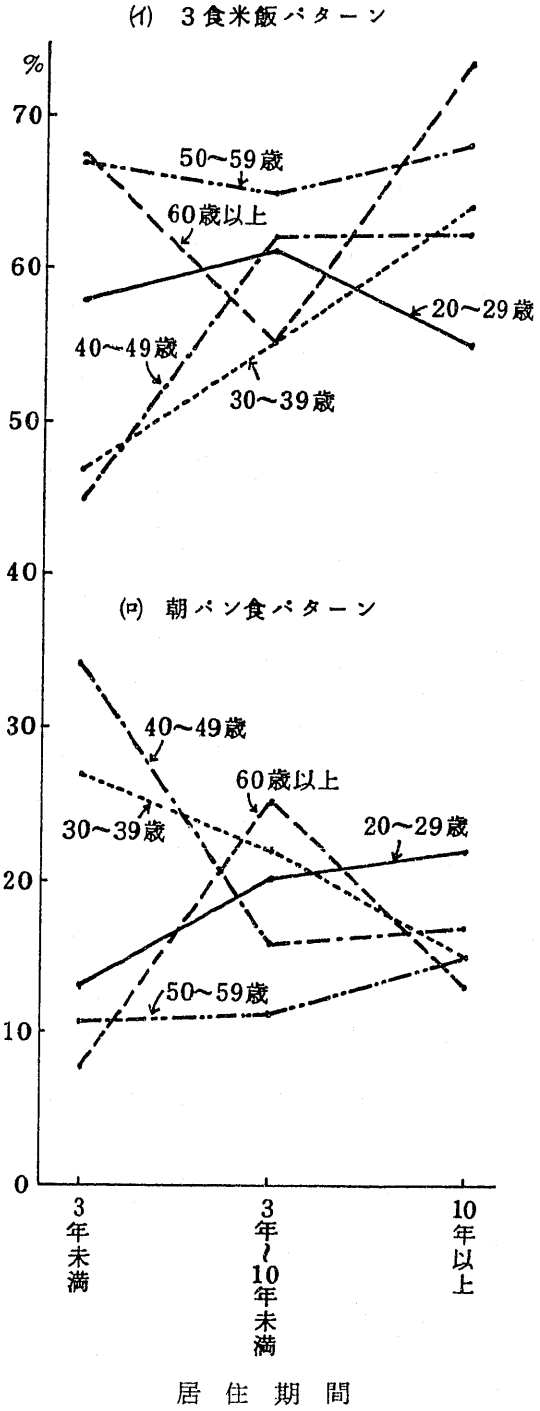
次に朝パン食，昼・夕米飯パターンについてみると，該当者が全般に少ないため，年齢別にかつ居住期間別に区分することによってなんらかの傾向を見出すことはこんなんである．

6—2　3大都市圏と地方圏間移動者で現在地方圏居住者の居住期間別，各年齢層別主食パターン

(1)　20～29歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層の中で居住期間からみてもっとも該当者が多いのは3年未満であって61%を占めている．次に3年～10年未満が23%，10年以上居住しているものは6%にすぎない．そこで，代表的な3年未満のものについての主食パターンをみると3食米飯パターンのものが58%，朝欠食，昼・夕米飯パターンが17%，朝パン食，昼・夕米飯パターンのものが13%となっている．朝欠食，昼・夕

図8　3大都市圏居住経験者で現在地方圏居住者の居住期間別，年齢別主食パターン



米飯パターンが朝パン食，昼・夕米飯パターンのものよりも多いことが注目される（表12—1）.

（2） 30～39歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層を居住期間別にみると，居住期間が長期化するにともなって3食米飯パターンの割合が規則的に増大し（46.6%→55.8%→64.1%），朝パン食，昼・夕米飯パターンが規則的に減少（27.3%→22.1%→15.4%）していることが特徴的である．ただ注目されることは朝欠食．昼・夕米飯パターンが3年～10年未満，10年以上のいずれの居住期間のものにおいても10%あることが注目される（表12—2）.

（3） 40～49歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層の主食パターンの居住期間別分布は，居住期間3年未満は該当者が少ないため比較は困難であるが，3～10年未満および10年以上をみると3食米飯パターンは63%，朝パン食パターンは17%に安定している（表12—3）.

（4） 50～59歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では居住期間が10年以上の長期居住者がもっとも多く64%を占めている．この10年以上

表 12—1　3大都市圏と地方圏間移動者で現在地方圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　（20～29歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	149	86	7	6	23	21	—	5	1
3年未満	91	53	3	4	12	15	—	3	1
3～10年未満	34	21	3	—	7	3	—	—	—
10年以上	9	5	1	1	2	—	—	—	—
				割		合			
総数	100.0	57.7	4.7	4.0	15.4	14.1	—	3.4	0.7
3年未満	100.0	58.2	3.3	4.4	13.2	16.5	—	3.3	1.1
3～10年未満	100.0	61.8	8.8	—	20.6	8.8	—	—	—
10年以上	100.0	55.6	11.1	11.1	22.2	—	—	—	—

表 12—2　3大都市圏と地方圏間移動者で現在地方圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　（30～39歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	251	132	16	5	57	23	2	11	5
3年未満	88	41	5	2	24	6	2	7	1
3～10年未満	104	58	7	2	23	11	—	1	2
10年以上	39	25	2	1	6	4	—	—	1
				割		合			
総数	100.0	52.6	6.4	2.0	22.7	9.2	0.8	4.4	2.0
3年未満	100.0	46.6	5.7	2.3	27.3	6.8	2.3	8.0	1.1
3～10年未満	100.0	55.8	6.7	1.9	22.1	10.6	—	1.0	1.9
10年以上	100.0	64.1	5.1	2.6	15.4	10.3	—	—	2.6

表 12—3　3大都市圏と地方圏間移動者で現在地方圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　(40～49歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	188	112	12	9	36	9	—	9	1
3年未満	29	13	—	1	10	2	—	2	1
3～10年未満	59	37	5	3	10	3	—	1	—
10年以上	86	54	6	2	15	3	—	6	—
				割		合			
総数	100.0	59.6	6.4	4.8	19.1	4.8	—	4.8	0.5
3年未満	100.0	44.8	—	3.4	34.5	6.9	—	6.9	3.4
3～10年未満	100.0	62.7	8.5	5.1	16.9	5.1	—	1.2	—
10年以上	100.0	62.8	7.0	2.3	17.4	3.5	—	7.0	—

表 12—4　3大都市圏と地方圏間移動者で現在地方圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　(50～59歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	147	98	11	9	19	5	—	4	1
3年未満	18	12	2	1	2	—	—	1	—
3～10年未満	26	17	2	2	3	2	—	—	—
10年以上	94	64	6	5	14	3	--	2	—
				割		合			
総数	100.0	66.7	7.5	6.1	12.9	3.4	—	2.7	0.7
3年未満	100.0	66.7	11.1	5.6	11.1	—	—	5.6	—
3～10年未満	100.0	65.4	7.7	7.7	11.5	7.7	—	—	—
10年以上	100.0	68.1	6.4	5.3	14.9	3.2	—	2.1	—

表 12—5　3大都市圏と地方圏間移動者で現在地方圏居住者の居住期間別にみた主食パターン　(60歳以上)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	157	109	8	9	23	3	—	5	—
3年未満	12	8	1	1	1	—	—	1	—
3～10年未満	27	15	1	1	7	2	—	1	—
10年以上	115	85	5	6	15	1	—	3	—
				割		合			
総数	100.0	69.4	5.1	5.7	14.6	1.9	—	3.2	—
3年未満	100.0	66.7	8.3	8.3	8.3	—	—	8.3	—
3～10年未満	100.0	55.6	3.7	3.7	25.9	7.4	—	3.7	—
10年以上	100.0	73.9	4.3	5.2	13.0	0.9	—	2.6	—

備考：居住期間の不詳は除いた.

の居住期間の主食パターン分布は，3食米飯パターンをとるものは68%，朝パン食，昼•夕米飯パターンをとるもの15%，昼めん類あるいはパン食，朝•夕米飯パターンのものが12%となっている（表12—4）.

（5） 60歳以上層の居住期間別主食パターン

この年齢層においてもっとも多いのは居住期間10年以上のものであって，73%を占めている．その他の短かい居住期間のものは少ない．この長期居住期間のものの主食パターンの特徴は，3食米飯パターンが74%と高く，朝パン食，昼・夕米飯パタンーンが13%，昼めん類あるいはパン食，朝・夕米飯パターンのものが約10%といった分布を示していることである（表12—5）.

第7章　大都市圏間移動者の居住期間別主食パターン

大都市圏間移動者の主食パターンの分布を居住期間別にみると表13の如くである．全体としての3食米飯パターンの割合は低く，約45%である．これを居住期間別にみると，居住期間が長期化するにともなって規則的に増大する傾向がみとめられる．3年未満の33%から，3年～10年未満の40%，10年以上の53%へと増大している．これとは反対に，朝パン食，昼・夕米飯パターンは3年未満の31%から，3年～10年未満の29%，10年以上の22%へと規則的な低下傾向がみとめられる．朝欠食，昼・夕米飯パターンも，水準としては低いが朝パン食，昼・夕米飯パターンと同様に居住期間の長期化にともなって低減している．

昼めん類あるいはパン食，朝・夕米飯パターンにおいては居住期間が長くなるにともなって増大してはいるがその差は大きくなく，10%から13%の間にある．

表 13　大都市圏間移動者の主食パターン

居住期間	総数	111	411	011	131＋141
	実		数		
総数	746	333	195	60	90
3年未満	156	51	49	27	16
3～10年未満	229	92	66	17	26
10年以上	349	184	77	15	46
	割		合		
総数	100.0	44.6	26.1	8.0	12.1
3年未満	100.0	32.7	31.4	17.3	10.3
3～10年未満	100.0	40.2	28.8	7.4	11.4
10年以上	100.0	52.7	22.1	4.3	13.2

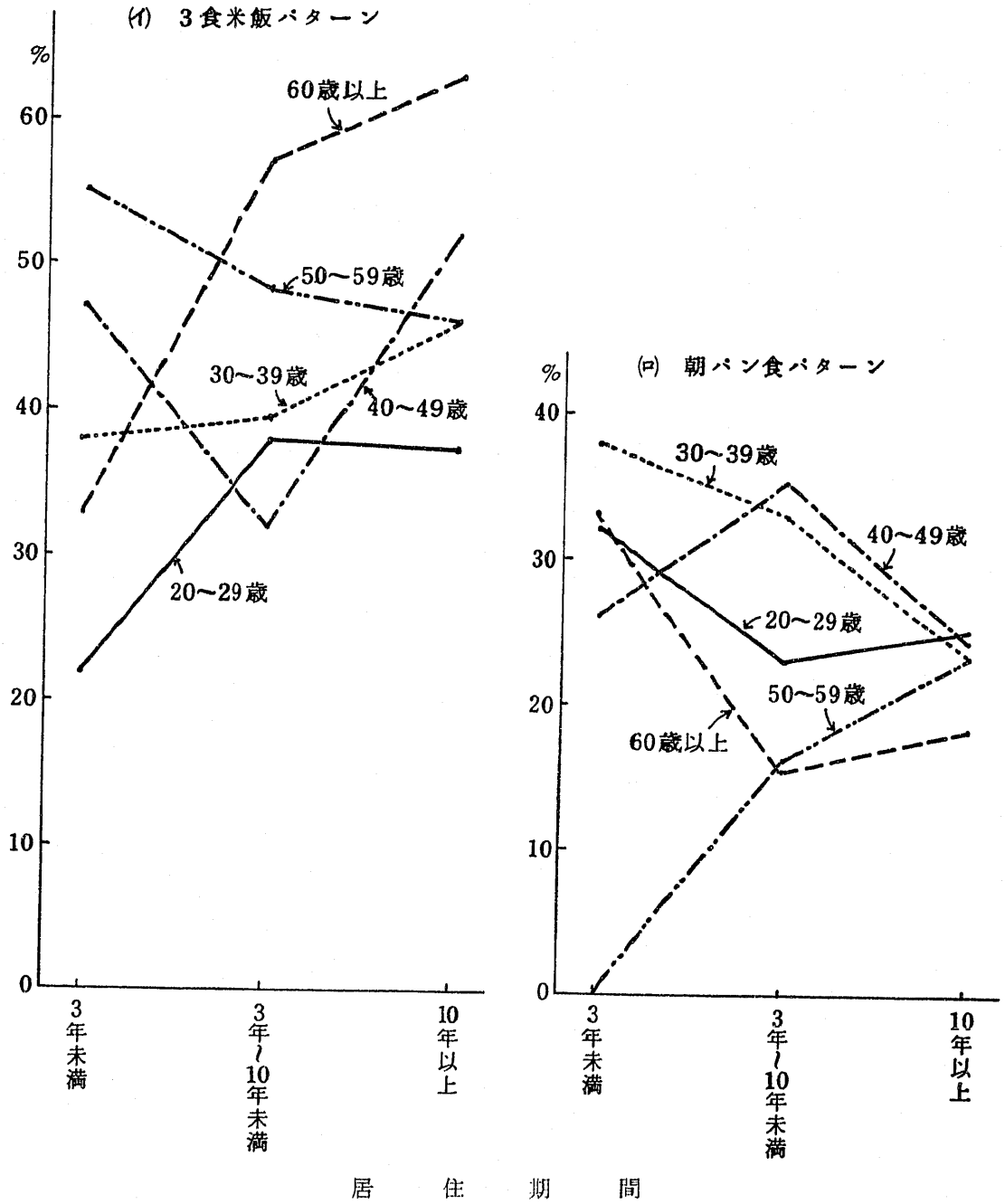
備考：居住期間の不詳は除いた．
主食パターンは4種類のみとしたためこれらの合計は総数と一致しない．

7—1　大都市圏間移動者の3食米飯パターンと朝パン食パターン

大都市圏間移動経験者について示したものが図9—(イ)，(ロ)であって，現在3大都市圏のいずれかに居住しているものについて，年齢別に居住期間別にみた3食米飯パターンと朝パン食，昼・夕米飯パターンの分布である．

3食米飯パターンについてみると，若い年齢層では，居住期間の短かいものが圧倒的に多く，3食米飯パターンをとるものの低い割合はこれらの人口のパターンを反映している．高い年齢層では居住期間の長いものが圧倒的に多く，したがって，長い居住期間の3食米飯パターンをとるものの割合がその年齢層の特徴を反映していると考えてよい．たとえば，60歳以上層では3年～10年未満および10年以上で，60%前後の3食米飯パターンをとるものの割合を示している．居住期間3年未満では著しく低い水準を示しているが，該当者はわずかに3名にすぎないため，この水準は一般的なものとはいえない．40～49歳および50～59歳といった年齢層でも，居住期間別分布が長期の方に集中しているため，短期のものにみられる3食米飯パターンの水準は統計的に問題がある．しかし，40～49歳層の3年～10年未満では3食米飯パターンをとるものの割合は著しく低いが，10年以上においては著しく高くなっており，かつ，このような居住期間別3食米飯パターンの水準が50～59歳層と逆になっている

図 9　大都市圏間移動者の居住期間別，年齢別にみた主食パータン



ことは注目される．50～59歳層では3年～10年未満では50%に近く，10年以上では若干低くなっている．しかし，比較的若い30～39歳層では居住期間の長期化にともなって規則的な増大傾向がみとめられる．50～59歳層では居住期間の長期化にともなって，3食米飯パターンの割合は低下の傾向をたどるのに対して，30～93歳層は反対に増大の傾向を示し，10年以上のもっとも長期居住期間では同一水準に到達する．

朝パン食，昼・夕米飯パターンについてみると若い年齢層の中で，居住期間の短かいものが高い水準を示している．たとえば30～39歳層で居住期間が3年未満のもので，朝パン食，昼・夕米飯パターンのものは40%に近い最高水準を示している．20～29歳層においても居住期間3年未満で高い割合を

表 14—1　大都市圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　（20～29歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	118	33	5	4	34	29	1	12	—
3年未満	75	17	3	1	24	21	1	8	—
3～10年未満	34	13	1	2	8	6	—	4	—
10年以上	8	3	1	1	2	1	—	—	—
				割		合			
総数	100.0	28.0	4.2	3.4	28.8	24.6	0.8	10.2	—
3年未満	100.0	22.7	4.0	1.3	32.0	28.0	1.3	10.7	—
3～10年未満	100.0	38.2	2.9	5.9	23.5	17.6	—	11.8	—
10年以上	100.0	37.5	12.5	12.5	25.0	12.5	—	—	—

表 14—2　大都市圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　（30～39歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	201	83	20	5	63	16	5	9	—
3年未満	50	19	4	2	19	5	—	1	—
3～10年未満	98	39	7	2	32	9	5	4	—
10年以上	52	24	9	1	12	2	—	4	—
				割		合			
総数	100.0	41.3	10.0	2.5	31.3	8.0	2.5	4.5	—
3年未満	100.0	38.0	8.0	4.0	38.0	10.0	—	2.0	—
3～10年未満	100.0	39.8	7.1	2.0	32.7	9.2	5.1	4.1	—
10年以上	100.0	46.2	17.3	1.9	23.1	3.8	—	7.7	—

表 14—3　大都市圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　（40～49歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	171	78	14	8	49	4	2	15	1
3年未満	19	9	2	—	5	1	—	2	—
3～10年未満	53	17	6	2	19	—	—	9	—
10年以上	97	51	6	6	24	3	2	4	1
				割		合			
総数	100.0	45.6	8.2	4.7	28.7	2.3	1.2	8.8	0.6
3年未満	100.0	47.4	10.5	—	26.3	5.3	—	10.5	—
3～10年未満	100.0	32.1	11.3	3.8	35.8	—	—	17.0	1.0
10年以上	100.0	52.6	6.2	6.2	24.7	3.1	2.1	4.1	—

表 14—4　大都市圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　（50～59歳）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	122	57	13	6	25	6	—	15	—
3年未満	9	5	3	—	—	—	—	1	—
3～10年未満	25	12	3	1	4	2	—	3	—
10年以上	87	40	7	5	20	4	—	11	—
				割		合			
総数	100.0	46.7	10.7	4.9	20.5	4.9	—	12.3	—
3年未満	100.0	55.6	33.3	—	—	—	—	11.1	—
3～10年未満	100.0	48.0	12.0	4.0	16.0	8.0	—	12.0	—
10年以上	100.0	46.0	8.0	5.7	23.0	4.6	—	12.6	—

表 14—5　大都市圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　（60歳以上）

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	134	82	7	8	24	5	—	8	—
3年未満	3	1	—	1	1	—	—	—	—
3～10年未満	19	11	—	2	3	—	—	3	—
10年以上	105	66	6	4	19	5	—	5	—
				割		合			
総数	100.0	61.2	5.2	6.0	17.9	3.7	—	6.0	—
3年未満	100.0	33.3	—	33.3	33.3	—	—	—	—
3～10年未満	100.0	57.9	—	10.5	15.8	—	—	15.8	—
10年以上	100.0	62.9	5.7	3.8	18.1	4.8	—	4.8	—

備考：居住期間の不詳は除いた．

示している．しかし，40～49歳層では居住期間3年～10年未満のもので，この主食パターンがもっとも多くなっていることが注目される．60歳以上では，3年未満のものが極めて高い朝パン食，昼・夕米飯パターンを示しているが，これはすでにのべた如く該当者は極めて少ないため信頼しがたい水準である．しかし．50～59歳，60歳以上の高年齢層において，3年～10年未満よりも10年以上のもっとも長い居住期間のものにおいて朝パン食，昼・夕米飯パターンが増大していることが注目される．これは，大都市圏への移動がかなり若い年齢層においてであったことと，その時期において朝パン食，昼・夕米飯パターンへ移行していったことの影響かと推測される．

7—2　大都市圏間移動者の居住期間別，各年齢層別主食パターン

（1）　20～29歳層の居住期間別主食パターン

この若い年齢層について居住期間別分布をみると表14—1に示されている．この年齢層では居住期間3年未満がもっとも多く64%，3年～10年未満が29%を占めており，10年以上は7%にすぎない．

20～29歳層でもっとも該当者の多い居住期間3年未満のものの3食米飯パターンをとるものはわず

かに23%であって，3年～10年未満のものの38%と比較すると著しい開きがみられる．これは，3～10年未満のものの大部分はおそらく両親と同居しており，そこでの主食パターンの影響が強いのに対して，居住期間3年未満では学生その他の独身者が多いことによるものかと思われる．このことは，居住期間3年未満のもので朝パン食，昼・夕米飯パターンの割合や朝欠食，昼・夕米飯パターンが著しく高いことにも反映していると考えられる．3年未満では朝パン食，昼・夕米飯パターンのものの割合は32.0%，朝欠食，昼・夕米飯パターンのものは28%と両パターンが高くなっている．これに対して3～10年未満では前者は23.5%，後者は17.6%とその差は大きい．

（2） 30～39歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では表14—2にみられる如く居住期間3年～10年未満のものがもっとも多く半分近く（49%），次いで10年以上（26%），3年未満（25%）となっている．この年齢層の3食米飯パターンをとるものの割合は，居住期間が長くなるにしたがって増加しており，また朝パン食，昼・夕米飯パターンや，朝欠食，昼・夕米飯パターンは居住期間が長くなるにつれて低下している．ここでは，居住期間と主食パターンとの間にもっとも典型的な相関関係がみられる．

（3） 40～49歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では10年以上の長期間居住者がもっとも多く，該当者全体の57%，次いで3年～10年未満が31%となっており，3年未満のものはわずか11%にすぎない．ここでは3年未満の該当者が極めて少ないため除き，3年～10年未満と10年以上についてみると，3食米飯パターンは10年以上の長い居住期間のものでは53%と高くなっている．3年～10年未満では3食米飯パターンは32%と低く，朝パン食，昼・夕米飯パターンの36%よりも少なくなっている．この年齢層でも比較的居住期間の短かいものにおいて著しい特徴をみせている（表14—3）．

（4） 50～59歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では10年以上の長期居住者が圧倒的に多く，71%を占めている．3年～10年未満のものは20%，3年未満のものは7%にすぎず，居住期間別比較は困難である．最長期居住期間のもののみについてみると3食米飯パターンは予想外に少なく46%，朝パン食，昼・夕米飯パターンは23%とかなり高い水準を示している（表14—4）．

（5） 60歳以上層の居住期間別主食パターン

この年齢層においては10年以上の長期の居住者が50～59歳層よりも多く80%近い．したがって，ここでも居住期間別の比較はこんなんである．ただ10年以上の長期居住期間のもののみについてみると，さすがに3食米飯パターンのものが多く63%，朝パン食，昼・夕米飯パターンのものは少なく18%となっている（表14—5）．

第8章　地方圏間移動者の主食パターン

最後に現在，3大都市圏以外の全国地方圏に居住していて，かつて地方圏間を移動した経験のあるものについての主食パターンを考察してみよう．

表 15　地方圏間移動者の主食パターン

居住期間	総数	111	411	011	131＋141
		実		数	
総数	647	454	75	35	52
3年未満	136	77	26	17	7
3～10年未満	208	140	26	10	19
10年以上	273	216	21	4	24
		割		合	
総数	100.0	70.2	11.6	5.4	8.0
3年未満	100.0	56.6	19.1	12.5	5.2
3～10年未満	100.0	67.3	12.5	4.8	9.1
10年以上	100.0	79.1	7.7	1.5	8.8

備考：居住期間の不詳は除いた．
主食パターンは4種類のみとしたためこれらの合計は総数と一致しない．

地方圏間移動者の主食パターンの分布を居住期間別にみると表15の如くである．この移動パターンにおいては一般に3食米飯パターンの割合は高く，70%を示している．これを居住期間別にみると3年未満の最短期間では57%，3年～10年未満では67%，10年以上では79%と，居住期間の長期化にともなって増大している．また朝パン食，昼・夕米飯パターンは，最短居住期間においてもっとも高く(19%)，3年～10年未満で13%，10年以上で8%と規則的に低下している．朝欠食，昼・夕米飯パターンにおいても，水準自体は低いが居住期間によって著しい差がみとめられ，3年未満では12.5%ともっとも高く，3年～10年未満では5%，10年以上では1.5%と低下している．昼めん類あるいはパン食，朝・夕米飯パターンをみると，3年未満ではもっとも低く5.2%，3年～10年未満および10年以上では9%前後の同水準を示している．

8—1　地方圏間移動者の3食米飯パターンと朝パン食パターン

まず，3食米飯パターンを年齢別に，居住期間別にその特徴をみると図10—(イ)の如くである．20～29歳層の短期間居住者である3年未満において3食米飯パターンをとるものの割合が最低を示していることと，3年以上の中期，10年以上の長期居住者においては著しく高いことがこの年齢層の特徴である．次に30歳以上のどの年齢層においても共通にみられる特徴がある．それは3年～10年未満の居住期間において，3食米飯パターンのものの割合がもっとも少なくなり，10年以上においてもっとも多く，3年未満が中間となっていることである．これは他の移動パターンとは異なっている特徴である．しかし，50歳以上の短期間居住者は極めて少ないので留意する必要があろう．次に朝パン食，昼・夕米飯パターンについては図10—(ロ)に示した如くであるが，これは各年齢別に居住期間別に分類すると該当者が著しく少なくなり，居住期間別になんらかの特徴を見出すことはこんなんである．

図 10　地方圏間移動者の居住期間別，年齢別主食パターン

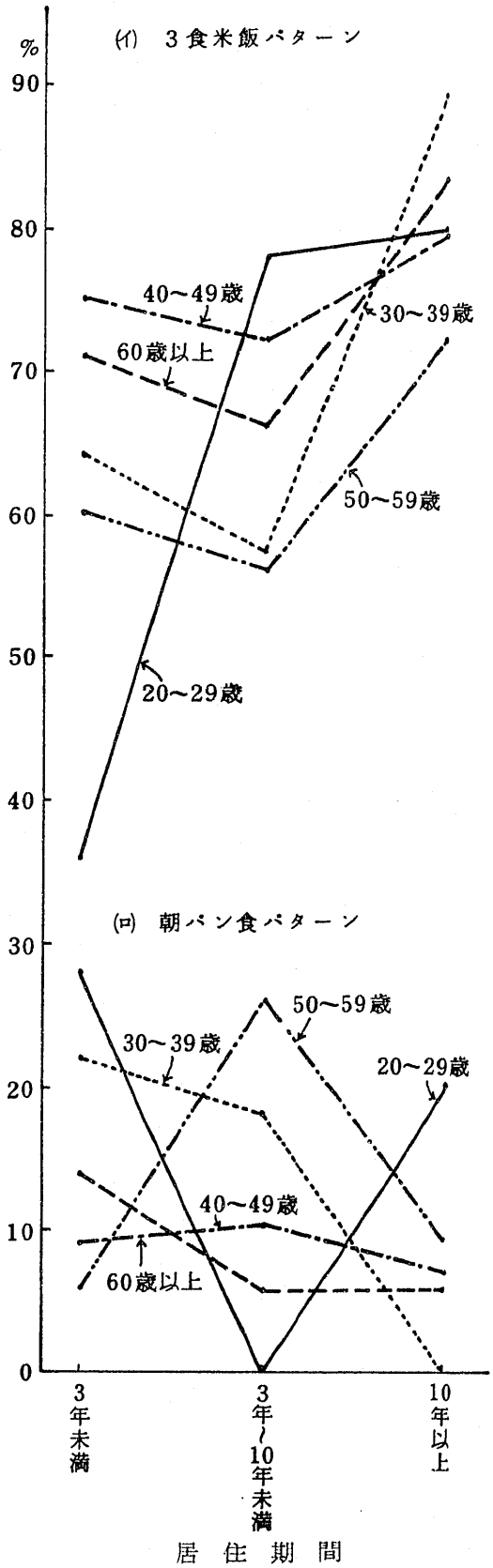


表 16—1　地方圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　(20～29歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	94	50	4	2	16	18	1	3	—
3年未満	50	18	1	1	14	12	1	3	—
3～10年未満	28	22	2	1	—	3	—	—	—
10年以上	5	4	—	—	1	—	—	—	—
				割		合			
総数	100.0	53.2	4.3	2.1	17.0	19.1	1.1	3.2	—
3年未満	100.0	36.0	2.0	2.0	28.0	24.0	2.0	6.0	—
3～10年未満	100.0	78.6	7.1	3.6	—	10.7	—	—	—
10年以上	100.0	80.0	—	—	20.0	—	—	—	—

表 16—2　地方圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　(30～39歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	108	70	5	3	17	5	1	7	—
3年未満	31	20	2	—	7	1	—	1	—
3～10年未満	54	31	1	2	10	3	1	6	—
10年以上	19	17	1	1	—	—	—	—	—
				割		合			
総数	100.0	64.8	4.6	2.8	15.7	4.6	0.9	6.5	—
3年未満	100.0	64.5	6.5	—	22.6	3.2	—	3.2	—
3～10年未満	100.0	57.4	1.9	3.7	18.5	5.6	1.9	11.1	—
10年以上	100.0	89.5	5.3	5.3	—	—	—	—	—

表 16—3　地方圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　(40～49歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実		数			
総数	204	155	7	5	19	9	1	8	—
3年未満	33	25	—	—	3	3	—	2	—
3～10年未満	88	64	4	3	9	4	—	4	—
10年以上	77	61	3	2	6	2	1	2	—
				割		合			
総数	100.0	76.0	3.4	2.5	9.3	4.4	0.5	3.9	—
3年未満	100.0	75.8	—	—	9.1	9.1	—	6.1	—
3～10年未満	100.0	72.7	4.5	3.4	10.2	4.5	—	4.5	—
10年以上	100.0	79.2	3.9	2.6	7.8	2.6	1.3	2.6	—

表 16—4　地方圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　(50～59歳)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実	数				
総数	126	86	8	8	15	2	1	5	1
3年未満	15	9	2	1	1	1	—	1	—
3～10年未満	23	13	—	2	6	—	1	1	—
10年以上	82	59	6	5	8	1	—	2	1
				割	合				
総数	100.0	68.3	6.3	6.3	11.9	1.6	0.8	4.0	0.8
3年未満	100.0	60.0	13.3	6.7	6.7	6.7	—	6.7	—
3～10年未満	100.0	56.5	—	8.7	26.1	—	4.3	4.3	—
10年以上	100.0	72.0	7.3	6.1	9.8	1.2	—	2.4	1.2

表 16—5　地方圏間移動者の居住期間別にみた主食パターン　(60歳以上)

居住期間	総数	111	131	141	411	011	911	その他	不詳
				実	数				
総数	115	93	4	6	8	1	—	3	—
3年未満	7	5	—	—	1	—	—	1	—
3～10年未満	15	10	1	3	1	—	—	—	—
10年以上	90	75	3	3	6	1	—	2	—
				割	合				
総数	100.0	80.9	3.5	5.2	7.0	0.9	—	2.6	—
3年未満	100.0	71.4	—	—	14.3	—	—	14.3	—
3～10年未満	100.0	66.7	6.7	20.0	6.7	—	—	—	—
10年以上	100.0	83.3	3.3	3.3	6.7	1.1	—	2.2	—

備考：居住期間の不詳は除いた.

8—2　地方圏間移動者の居住期間別，各年齢層別主食パターン

各年齢層別に，居住期間別の主食パターンの分布をみると表 16-1，16-2，16-3，16-4，16-5 の如くである.

（1）　20～29歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では居住期間3年未満がもっとも多く50%に近い．この居住期間グループでは3食米飯パターンが36%でもっとも低く，朝パン食，昼・夕米飯パターンが28%，朝欠食，昼・夕米飯パターンが24%という高い水準にある．3年以上の居住期間についてみると3食米飯パターンが80%前後と圧倒的に多い.

（2）　30～39歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では居住期間が3年～10年未満のものがもっとも多く50%を占めている．この居住期間グループの主食パターンの特徴は，3食米飯パターンのものが57%，朝パン食，昼・夕米飯パターンが19%，朝欠食，昼・夕米飯パターンが6%といった構成をもっていることである.

（3） 40～49歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層でもっとも多いのは3年～10年未満の居住者で43%，次いで10年以上の居住期間のものが38%であり，3年未満は16%にすぎない．3年～10年未満と10年以上の居住期間のものについてみると居住期間の短かい前者において，3食米飯パターンをとるものの割合が低く，朝パン食，昼・夕米飯パターンならびに朝欠食，昼・夕米飯パターンが後者よりも高くなっていることが特徴である．

（4） 50～59歳層の居住期間別主食パターン

この年齢層では10年以上のもっとも長期間居住者が圧倒的に多く65%を占めている．3年～10年未満は18%，3年未満は12%にすぎない．そこで，10年以上の長期居住者の主食パターン分布についてみると，3食米飯パターンをとるものの割合は72%，朝パン食，昼・夕米飯パターンのもの10%，昼めん類またはパン，朝・夕米飯パターンが13%となっている．

（5） 60歳以上層の居住期間別主食パターン

この年齢層では10年以上の長期間居住者が80%近くを占めている．この年齢層の主食パターンの著しい特徴は，3食米飯パターンのものが83%と高く，朝パン食，昼・夕米飯パターンのものは 6.7%と少ない．昼めん類，朝・夕米飯あるいは昼パン朝・夕米飯パターンもあわせて6.6% にすぎない．

む す び：

本研究では“居住期間”を媒介として，人間環境―社会環境であれ，自然環境であれ―と食生活パターンとの関係を追求することにあった．人間行動は，究局において，環境に対する妥協的，調和的あるいは開発的適応行動である．食生活はこの人間行動の中でのもっとも基本的なものである．

居住期間は，人口学においては出生力における“結婚持続期間”と同様に生活行動上の重要な変数である．著者は，調査結果を手掛りとして，対象者の居住地域，移動パターンから区分した地域，年齢等による集計によって“居住期間”という変数の食行動―ここでは主食パターン選択行動―への影響を分析した．

この研究のもっとも重要な成果は，特に3食米飯パターン，朝パン食パターンといったもっとも基本的な主食パターンにおいて“居住期間”という要因が注目すべき影響をあらわしていることである．そのばあい，居住地域の特性や移動パターンの食生活への影響が居住期間によって否定されるものでないことに留意すべきである．移動パターンや地域の都市化度による食生活への影響という基本的な前提の中で，居住期間という新しい変数の意義を明らかにすることができたことが，本研究の成果といえよう．

もちろん，居住期間の背景には年齢，職業等の要因の影響があることは明らかであり，対象人口の社会的，経済的，人口学的要因の影響を慎重に考慮した一層の研究が必要であることはいうまでもない．

Duration of Residence of Migrant Population and Primary Food Pattern

Sumiko UCHINO

1. The focus of this paper is to examine possible relationship between the individual's duration of living in the current residence and his or her primary food selective behavior, on the basis of data derived from the 1976 Survey on Migration of Regional Population conducted by the Institute of Population Problems, Ministry of Health and Welfare.

2. Major concern in this paper was to find out possible effect of the duration of residence on dietary life. Duration of residence is an important variable in demography like duration of marriage in ralation to fertility behavior.

3. I have been concerned with relationship between migratory behavior and dietary performance for a long time. Special emphasis was placed on the duration of residence in relation to dietary behavior in this article.

4. One of the most interestion findings derived from analysis was that especially "Residence Duration" factor seems to hace exerted noteworthy effect on dietary patterns, in particular three meals based on rice and combined pattern of bread based breakfast and rice-based lunch and dinner, which are becoming more and more futdamental patterns for Japanese.

5. However, recognized effect of the duration of residence should not be considered to deny varieus effects of socio-economic characteristecs of regions where people live, and also those of migration patterns. The duration of residence is another factor affecting dietary behavior which should be taken into account in studying changes in dietary behavior responding to environmental changes-social and natural environment-.

6. Of course, it should be kept in mind that there are many fundamental elements like age, sex, occupation, incme level and so on, which are affecting dietary behavioral parformance.

7. Some information, though preliminary, on dietary behavior primarily concerned with selective performance of primary food pattern by different region charaterized by urbanization, and also by migration pattern and age in addition to the duration of residencd, are given here.